層富

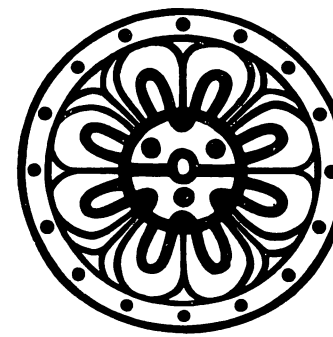
（川口勇喜）

会誌名「層富」(そほ・そふ）の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は，古代には「層富」または「曽布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた）の一つでありました。出典は『日本書記』の神武即位前紀己未年の春２月壬辰朔辛亥（20日）の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく，あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌名としました。ご愛顧の程を。　　（網干善教）



会　章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ，単純な円形にまとめ，音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも，二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

（基本デザイン　朱雀・筧　裕）

建都1300年イベント

層富

一九九六年

第十三号　目次

巻頭言	網干　善教	1
考古学よりみた飛鳥	網干　善教	2
漢詩	片桐　一夫	9
私の歩んだ道	渡邊　亮斗	10
短歌	網干　善教	31
ウソ（諺）ほんま	川口　勇	39
方言	廣田　好實	41
あしたへ祈る	木村　長子	44
三度赤道を越える	島田　仁	45
『ならの女性生活史』調査を終えて	宮川恵美子	49
「三」にまつわる四方山談議	森下　勉	51
想うこと	平山　通	53
俳句	牧野　自然	56
グループからの便り		64
第十三回文化祭記録		102

【巻頭言】

『層富』の刊行にあたって

会長　網干善教

「諸行無常」といいますか、「無常迅速」といいましょうか、世の中は非常に早い速度で変化していきます。その結果、生活や仕事が非常に便利になったり、早く達成できたり、より正確に、確実になってきました。その反面、いろいろな障害や矛盾も現われています。これは今の世の中に限ったことではありません。人間社会にはそうした動きを回転させながら進歩してきたのです。

スポーツの世界を見ても、マラソンは先頭の二・三人だけが走っているのではありません。野球もプロ野球だけが野球しているのではありません。相撲だって横綱・大関だけが相撲を取っているのではありません。上手、下手は別として、その人が一生懸命に、しかも楽しんでやっている姿も立派だと思うのです。

平城ニュータウン文化協会は、そうした一流人の集りでなくとも、皆んなが何か希望をもち、楽しく、生甲斐を求められるような活動であり、その役目をもつ組織でありたいと考えるのです。

「来週は文化協会があるなあ」、「今度はどんなことができるのか」「どんな話が聞けるのか」、そうした期待がもてるようなものでありたいと思うのです。

また、明日からも頑張りましょう。

第十四回総会記念講演（要旨）

『考古学よりみた飛鳥』

――飛鳥でどのような問題を考えるか――

関西大学教授　網干善教

昭和八年の秋、石舞台古墳の発掘調査がはじまって以来、戦後からだけでも約五十年、飛鳥地域の考古学的調査が継続されてきました。そこで、その成果を概観し、何が問題なのか、将来どのようなことを考えなければならないのかという課題を整理してみたいと思います。

これを論文構成のように章節をたてて話をすすめてゆきたいと思います。

まず「序説」であります。「総論」とでもいうべきか、「はじめに」に相当します。

第一節は、「飛鳥」「明日香」とは何かという問題です。「アスカ」を表記するのに「飛鳥」と「明日香」の二つがありますが共に正しい。ただし、「飛鳥」はその歴史的由来を考えなければいけないだろうし、「明日香」は「明日」という熟字訓に「香」という佳字がついて表現されたものでしょう。

「飛鳥」という文字の表記のはじまりは『日本書紀』などによって、飛鳥の諸宮名の由来や飛鳥寺という法名の由来などから、その時期を考えることができると思います。そして大化改新以後、瑞祥（めでたいことのきざしとなるしるし＝吉兆）願望によって表記されたものと考えるのです。

第二節は、七世紀代なぜアスカという場所に都京が営まれたかという問題であります。これは非常にむつかしいことです。すなわち「何がみつかれば考古学的にこの

問題が解決するのか」という条件設定が至難なのです。邪馬台国論争と同じであります。下手をすると推理小説のような話になる可能性があります。理由はいろいろ考えられましょう。しかしあくまでも推論の域を出なくて、話題にはなるが、どこまでが真実かは明らかにならないのです。

本論、第一章は飛鳥京の成立であります。そして第一節は飛鳥京域の設定であります。主として七世紀の代に倭京（飛鳥京）が成立します。この場合、狭い飛鳥の地域に多くの宮殿が造営されたことは文献上からも、発掘調査の成果からも判明しています。また、この時期は佛教が伝来し、飛鳥一〇〇年の宮都には多くの壮大な寺院が建立されました。これも証明できます。そこで問題なのは、これらの宮都や寺院が何の計画もなしに、無造作に宮域や寺域を占有し、建物を建てたならば、飛鳥は都としての機能を果せなくなるでしょう。そうすると宮都飛鳥には、どこに宮殿を造営し、どこに寺院を建立し、これらをどのような道路で結ぶかという都市計画というか、マスタープランのようなもの、私たちがいう「地割」がどのように設定されていたかということになります。例えば飛鳥寺の南門があります。西門も確かめられています。この門の前の道はどこからどこに通じていたのか。

川原寺にも南門があります。橘寺には東門と北門跡があります。門があるからには道があります。当然飛鳥板蓋宮や飛鳥浄御原宮にも門があった筈であります。これらがどのような道路によって結ばれていたのか。また、発掘調査によって検出した多くの水路が、どのように敷設されていたのか、建物や道路との関係はどうか、という課題があります。飛鳥京跡の発掘調査は、まだ断片的なものであって、確実なことは分っていません。

一方、地割の存否をめぐっても意見が分れます。方格地割が存在したとの意見もある、存在しないという意見もあります。私は存在したという意見をもっています。ただ存在したとしても、その地割の割り付け方をめぐって、研究者各氏の意見は分れます。これは将来飛鳥京跡の発掘がすすんでいけば、いろいろなところで証明され、確定するであろう。その可能性は多分にあります。現在の調査の進捗はまだそこまでいたっていないのです。今のところ断片的に確認した事実と水田や道路などを手掛

りに考えているのが現状であります。

付け加えますと、宮殿建築に必要な檜材の調達と運搬であります。現在檜材は計画的な植林によって需給されています。飛鳥時代果して大量の檜材があったのかどうか。藤原京造営に近江田上山から運んできたことが分っていますが、飛鳥京の造営にも同様なことが考えられるかどうかも検討する必要があろうと思います。

第二節は個々の宮殿の位置の問題であります。

推古天皇の豊浦宮、小墾田宮、舒明天皇の岡本宮に、皇極天皇の板蓋宮、斉明天皇の川原宮、後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮のほか河辺宮、川原宮、嶋宮なども営まれました。これがどの位置にあるのか。すべて平面的なのか、重なりがあるのかということも疑問であります。これも飛鳥京跡発掘から約四十年、当初は暗中模索の状態でありましたが、遺構の確認、木簡の出土などによって佳境に入ってきた感があります。今後、核心の部分の発掘と、木簡や土器などの出土によって確定していくであろうと思います。

第三節は個々の宮殿の構造の問題であります。現在の明日香には地上に建物が残っていません。かつての建物は遺構として地中に埋まっています。しかも発掘すべき土地の殆んどは水田であり、農業が営まれているところですから、簡単に発掘するわけにはいきません。いろいろな交渉や問題があります。そして発掘できるようになったとしても小さな、狭い範囲ではよく分らない。例えば建物の一部を検出したり、二本や三本の柱が見つかっても、一棟の八分の一とか六分の一とかでは正確な建物を復原することはできません。柱が二本や三本出ても、建物のあることは判断できるが規模や構造、他の建物との関連などは分らないのです。これも将来、発掘面積が拡大するに及んで漸次解明されるであろうと思われることです。

次に第二章では佛教寺院の問題を取り上げます。

六世紀中期、わが国に佛教が公伝したといわれています。これは百済佛教であるらしいのです。そしてその地は飛鳥であったことはまず間違いないでしょう。

ところで、どのような佛教が伝わったのでありましょうか。当時は宗派佛教ではなかったと思います。釈迦如来なのか、薬師如来なのか、阿弥陀如来なのか、それと

も弥勒菩薩の信仰なのか。

当初どのような形で受容したのか。佛教寺院はまだ建立されていなかったから、石川精舎や向原精舎は私宅であっただろう。それからしばらくして日本でも本格的な佛教寺院が建立されることになりました。飛鳥の法興寺です。けれども、日本では過去に佛教寺院の建立がなかったから礎石を置き、瓦で葺いた建物を設計することも施工することもできなかったでしょう。そこで百済に対して寺工や瓦師などの派遣を要請してやっと着工できたことが文献で知られます。

屋根を葺いた瓦の重みに耐えるために礎石を置かなければなりません。これは当時における斬新な建築技法であったでしょう。それまでは掘立柱の建物でありました。最近話題となった縄文時代の青森の山内丸山遺跡や弥生時代の大阪池上曾根遺跡、九州吉野ヶ里遺跡などすべて掘立柱の巨大な建物であるから、その技術はあったとしても、礎石建造物は異様であったと思われます。弥生時代に掘立柱が沈下しないように榑板を敷いた例はあったとしても礎石とは意味も技術も異ります。

建物ができて、堂内には金銅の佛像が祀られました。その姿相は当時の人たちには全く見なれない情景であったと考えてよいでしょう。

飛鳥ではこうした佛教寺院と並んで依然として、掘立柱の宮殿建築が造営されていました。

伝統と外来、保守と革新、宮殿建築と寺院建築、それが飛鳥京内という狭い地域の中で、近接して併存していました。そこにはどのような意識があったのでしょう。どのように感じていたのでありましょうか。崇佛、廃佛の運動もこうした考え方の対立であろうと思います。これは大変難しい問題です。単なる思いつきや、全くの想像で発言するのであれば簡単かも知れないし、面白い話をつくることができるかも知れませんが、それでは無責任になってしまうことになります。「虚構のロマン」では歴史学は深化しません。ことに実証的な考古学ではなおさらであります。

第二節は伽藍と伽藍配置の問題です。伽藍とはサンスクリットの「サンガランマ」、漢訳されて「僧伽藍摩」と称されるものであります。建物は用途に応じて構造が異なります。門と金堂と講堂は異なります。法興寺（飛鳥寺）では一塔三金堂と考えられていますが、創建当初

から三金堂であったのか。その源流は高句麗寺院にあるとされますが、実際に北朝鮮に行って見た寺院跡とは異なります。果して従来からいわれてきたように三金堂は本当か。一塔一金堂で計画され、後に二金堂といわれる建物が増設されたのではないかということも視野に入れておくべきかも知れないと思います。「飛鳥寺金堂増建、非増建説」という問題であります。

川原寺も不思議な寺であります。第一に建立の理由も年代もわかりません。しかも、他の寺とは非常に変った建築様式であり、伽藍配置であります。出土瓦は白鳳時代最高の美しい瓦であります。

山田寺も蘇我倉山田石川麻呂によって発願された寺でありましたが、途中でその一族が自ら命を絶ちました。それを完成させたのは持統天皇であったと思います。一体何がそうさせたのか。

伽藍配置自身は四天王寺式といわれますが、それに個性があって一様ではありません。瓦は山田寺式瓦と称される標式的なものであります。

奥山久米寺は飛鳥時代に建立され、飛鳥時代に消滅した寺院であるかも知れませんが、寺伝が全く失われています。

橘寺は主軸の方向が東面します。他の寺院とは異なります。坂田寺も主軸を東北に向けます。岡寺の伽藍は全くわかりません。瓦は四種類の葡萄唐草文軒平瓦が用いられていました。

檜隈寺も通常の伽藍配置ではありません。基壇も瓦積みであります。なぜこのように飛鳥の諸寺院は個性があって異なるのか。

もう一つ重要な問題、都が飛鳥・藤原京から平城京に遷りました。寺院もこの遷都と共に移ったものがあります。法興寺（飛鳥寺）は元興寺、紀寺は紀寺、薬師寺は薬師寺、大官大寺は大安寺となりました。一方、遷都に関係しないで飛鳥にのこった寺があります。川原寺、橘寺、山田寺、坂田寺、岡寺などである。何故移った寺と移らなかった寺があるのか。これも重要な課題でありますがむずかしい問題であります。

第三節は瓦の生産の問題であります。飛鳥には飛鳥京時代に瓦を焼成した遺構が僅かしか見つかっていません。多くの寺院の建立に必要な瓦をどこから調達したのか。これも考古学上の課題であります。

第三章は飛鳥における古墳墓の問題であります。第一節は地域の特色の問題であります。飛鳥の古墳は地域によっても、時代によっても違います。

飛鳥の古墳は石舞台古墳周辺と檜隈地域にわけられます。石舞台古墳周辺をみても飛鳥川の本流である稲渕川と、支流の冬野川（細川）では全く異なります。稲渕川流域には塚本古墳をはじめ二・三の古墳伝承地がありますがその数は少ないのです。それに比べて冬野川流域は三百基以上にも及ぶ大古墳群でありますが、川の右岸と左岸ではその数が極端に違います。右岸すなわち南向傾斜には多く、左岸の北向傾斜には少ない。これは横穴式石室の構造にかかわるのかも知れません。

石舞台古墳を築造するのに数基の古墳が破壊されました。しかし、これには事前に改葬していたことも分りました。刳抜式家形石棺は都塚古墳、石舞台西南側古墳、塚本古墳で残存していました。形式からみるとこの三基はここに挙げた順序に造られたものと考えてよいでしょう。

檜隈の古墳は個性があります。欽明陵は前方後円墳、両側に入口をもつ真弓鑵子塚、切石造りの岩屋山古墳、一室に二棺の菖蒲池古墳、巨石に二室を刳抜いた牽牛子塚　壁画のある高松塚、キトラ古墳、壁画のないマルコ山古墳、特殊な構造の鬼の雪隠・俎、火葬墓の中尾山古墳など全く異なる古墳が檜隈へ丘阜に築かれています。束明神古墳も入れてよいでしょう。

ここでは被葬者論は陰をうすめ、聖なるラインも存在しません。

第二節はこれらの古墳の築造時代と構造的特色であります。特に檜隈の場合は、終末期古墳とのかかわりは重要であります。

第三節は高松塚壁画を代表する文化史的課題にあります。その前提として、高松塚、キトラ古墳に壁画があるのに、なぜマルコ山古墳に壁画が描かれていなかったのかという抜本的な問題があります。

終末期古墳の副産品の性格とは何か。壁画の思想は何か。まだ残された課題は多くあります。

第四章　飛鳥の石造物の問題です。

檜隈の猿石、橘寺の二面石、石神出土の石造物、亀石、駒槃石、立石、酒船石など、いつ、誰が、何のために

造ったかわからないものが多いのです。

第一節は二面石の問題です。檜隈猿石の四基のうちの三基は二面石、橘寺二面石、石神の道祖神像といわれるものがそれであります。獣面人身の意味も考えてみる必要があります。

第二節は酒船石の問題であります。最近の調査成果から、重要な意味を秘めているように思えるようになりました。

第三節は立石の問題です。川原寺の立石、上居の立石、岡寺山の立石、豊浦の立石などがそれであって、これらはどのような意味をもつのであろうかということも課題です。

最後に附章として二項目があります。

第一節は飛鳥の歴史は飛鳥時代だけではありません。縄文遺跡もあれば、弥生遺跡もあります。これらの確認と調査とその成果であります。

第二節は飛鳥の中世から近世にかけての問題である。佛像も野の仏も多数あります。立派な道標もあります。役者像もあります。文献では近世紀行文ものこされています。これらをみて古代の飛鳥をどのように復原するかという大きな課題があるのです。

以上のように飛鳥を概観しただけでも、これから解明されなければならない課題が非常に多くあります。ここにあげたのは氷山の一角であって、それぞれが重要な問題であると同時に、飛鳥の歴史は一地方史の問題でなく、そのまま、日本歴史の根幹につながる課題でもあります。

飛鳥の発掘が次の十年、二十年、三十年、五十年、どこまで進むか。それによって日本史の課題がどこまで解明されるか、大いに期待するものであります。

【漢　詩】

宮跡梅苑

滿天花氣緑風新
窓外柳絲方報春
聞道平城宮跡苑
梅香馥郁和鳴頻

他郷晩學

佛語欲修參大賢
顧哀師教正完全
老殘晩學難成就
慙愧和州已十年

片桐　一夫

滿天の花気　緑風新たなり
窓外の柳絲　方に春を報ず
聞くならく　平城　宮跡の苑
梅香馥郁として和鳴頻なるを

佛語修めむと欲し大賢に参ず
顧哀の師教　正に完全
老残　晩学　成就し難く
慙愧す　和州　已に十年

【私の歩んだ道】

わが青春の記

渡邊亮斗

前編

大和郡山市永慶寺町に永慶寺という旧柳沢藩主家の菩提寺がある。云うなれば名刹である。その寺の墓地に柳沢家代々のお墓があるが、墓地の一角に重厚長大なる墓碑が建てられている。墓碑の正面には次の通り彫られている。「陸軍歩兵中佐従五位勲三等功四級岡田茂之墓」、左側面に「室　カツ子」、更に裏面には、次の墓誌銘が刻されている。所謂仮名交り文で戦前の文章であるが故に、常用漢字でない古い型の字があるけれども、現在使用されている字に書き換えてある。例えば満洲事変は本文中では滿洲事變と書かれている具合である。

陸軍歩兵中佐岡田茂君茲ニ眠ル　君ハ兎美三郎氏ノ二男奈良縣郡山町箕山ニ生ル　夙ニ靖献ノ念篤ク大正四年陸軍歩兵少尉ニ任官爾来一意軍務ニ精勵シ模範將校ノ令名アリ青島戦及滿洲事変ニ参加随所ニ勲功ヲ樹テ武門ノ面目ヲ発揮セリ　然ルニ昭和十二年七月十八日布施部隊ノ将トシテ奉天省興京縣東松木嶺ノ戦ニ於テ数十倍ノ敵ヲ攻撃シ勇躍敵中ニ突入壮烈鬼神ヲ泣カシムル戦死ヲ遂グ　噫　君ノ人格ハ玲瓏玉ノ如ク至誠義俠其高風流韻ハ上下ノ崇敬ヲ聚ム　今ヤ身ハ其本分ニ斃レテ滿洲建国ノ神ト為ル武人ノ本懐万人ノ仰望スル所而シテ時難斯ル良将ヲ思フノ情切ナルモノアリ　拙文ヲ刻シ君ノ武徳ヲ後昆ニ傳フル所以ナリ　昭和十三年五月

前滿洲独立守備歩兵第一大隊長歩兵大佐布施安昌謹識

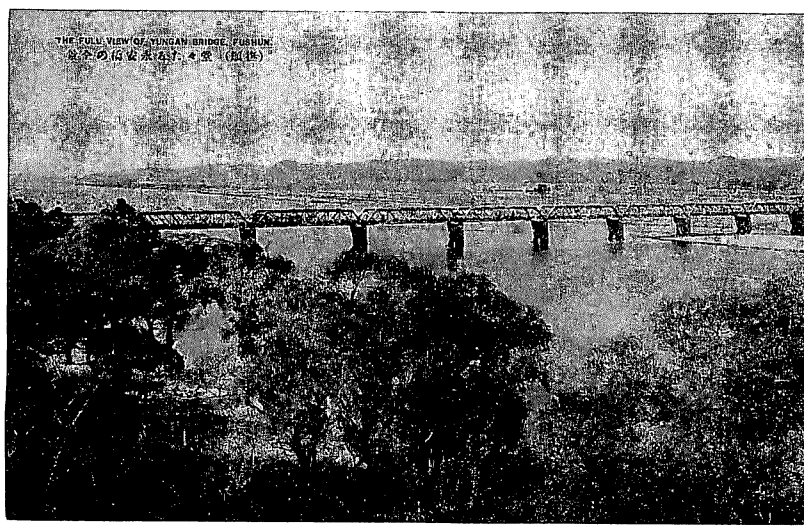
寧楽　史邑　辻本勝巳恭書

文中「靖献」とあるは「せいけん」、意味は「臣下が正義に安んじて先王の霊に真心をささげること（書経・

微子」」、「後昆」は「こうこん」、意味は「子孫、後の世、昆も後」。（旺文社漢和中辞典による）。

ここで若干註を入れる。この墓は岡田茂と妻カツ子の墓で、普通の何々家先祖代々の墓ではない。従って両人以外の霊を祀ることはできない。この墓を重厚長大と云ったが、三段の階段がある約三米四方の石囲いで、石燈籠二基、墓碑は三段の石を重ねた上に巾約四十五糎、高さ約一米八十糎の四角柱が建っている。実は筆者が拓本を手がけたのはこの墓誌銘を採拓したいという思いもあったわけである。それでは岡田夫妻は筆者に取ってどうゆう関係にあったかと云えば、恩師であり、また実の父母以上の義父母に当る方であった。筆者の今日あるはお二人のお蔭と申しても過言ではない。それらのことについては後で触れることにして、碑面碑文について若干の説明をしておきたい。もとよりその方面の専門家でもなく資料を繙いてのものでなく、怪しげな記憶に基づくものであるので或は間違っていることもあると思うけれどもその辺はお許しを予じめ願っておく。

先ず碑面の陸軍歩兵中佐であるが、この「歩兵」という兵種は筆者の場合使用されなかった。筆者が幹部候補



撫順の渾河にかかる永安橋

生出身の将校として「任陸軍少尉」の辞令を受けたのは昭和十六年十一月一日付で唯の陸軍少尉であった。手許にその辞令書が記念品として残してあるが、日付の上に「内閣之印」が朱で押印されてあり、末尾に「内閣総理大臣従三位勲一等東條英機宣」と墨書（勿論印刷）してある。序に申せば、「叙正八位」は昭和十六年十二月一日で、「宮内省印」が朱印で押されていて、末尾に「宮内大臣正二位勲一等松平恒雄宣」と印刷されている。なお用紙はいずれも堅い白紙で、縦二十一糎一糎、横二十九糎八糎、右肩上に直経約四・五糎の菊の紋章、左下隅に約二・五糎の桜の模様が透しで入っている。朱印は本物と思われる。

次に話を戻して陸軍歩兵中佐の次に彫られている所謂位階勲等であるが、武人の特別に功績あった者に贈られる金鵄勲章が功四級であったと云うことである。位階勲等は今日でも有効に使用されているようである。

なお筆者の「任陸軍少尉」は十一月一日付であるが、同日付で予備役被仰付――予備役に編入され、即日召集されたということである。士官学校出の将校は任官後原則として予備役編入までずっと現役である。

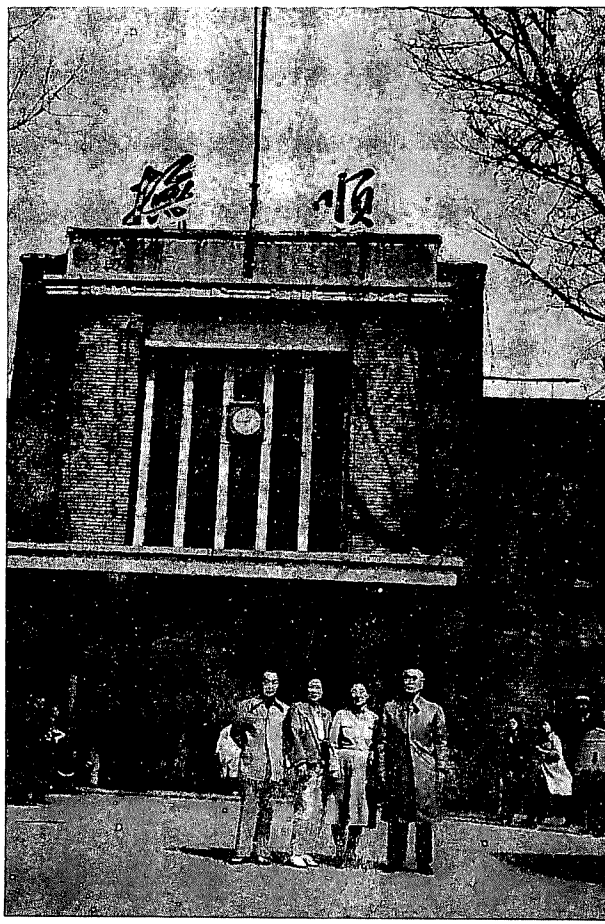
筆者は旧制中学「南満洲鉄道株式会社撫順中学」を卒業し哈爾濱學院に入学した。筆者と同年代の方には旧中学時代軍事教練の科目があったと思うが、墓碑の岡田歩兵中佐は少佐時代撫順中学の軍事教官として我々を訓育され、四平街の布施部隊へ転属になったのが昭和十四年であった。教官時代に教練にも学科の時間があって何かの時「歩騎砲工輜重」という兵科名を習ったことを覚えている。歩は歩兵で土地を占領し確保する。騎兵は索敵に当る。歩兵の襟章は赤、騎兵は萌黄色で、オリンピック馬術で西騎兵大尉の活躍が記憶にある。砲兵は黄色の襟章、「砲兵の歌」では山吹き色である。工兵は陣地構築や橋を掛ける架橋の任に当たる。輜重は弾薬糧秣の担当で所謂後方部隊に属する。その他衆知の軍医・主計がある。大戦末期の昭和十九年頃には「船舶砲兵」なる兵科があって甲幹生として入校して来た者もあった。

墓誌銘では青島戦に参加したとあるが、これは日英同盟により対独戦の後、青島の守備に当ったのである。時に大正八年九月、筆者の生年は大正七年四月であるからずっと昔のことになる。ここで一言蛇足を付け加えるならば、事変等はじめ私的な生年等を西暦で統一しておく

と非常に便利である。例えば私の生年は一九一八年でソ聯革命の翌年であるが崩壊は一九九一年であるから、ソ聯邦としては寿命は七十年余であったわけである。これが役立ったのは岡田中佐夫人が昨年一月に死去したが、一体何歳になって死んだのかと云う事であった。彼女は明治三四年生＝一九〇一年生れだったので、九五年まで数え年で九十五歳、満で九十三歳と言う事である。

当時日本の軍隊は奉天の独立守備隊の独立守備歩兵第二大隊であった。岡田少佐はその大隊に属していたわけで、撫順にも守備隊が一ケ中隊駐屯していた。墓誌銘にある「前満洲独立守備歩兵第一大隊長」は本部が四平街にあったが、前記の第二大隊は本部を奉天に置いていたのである。

我々の南満鉄撫順中学時代、全満にと云っても満鉄の附属地だけのことであるが、安東中学（朝鮮新義州と鴨緑江を隔てて安東市にあった）、鞍山中学、新京商業、奉天中学の五校があった。なお大連は関東州庁の管轄下



戦後の撫順驛

にあって、大連一中、二中の外大連商業があった。外に高等専門学校と大学は、奉天に南満医科大学、大連に南満工業専門学校、旅順に旅順工科大学、北上して哈爾濱に哈爾濱學院があった。筆者が中学生時代満洲に五中学があったが、御多分に洩れず全満中学の陸上競技、スケート、柔剣道、ラグビーの大会があったが、異色なのは射撃大会であった。軍事教練に使う三八式歩兵銃による二〇〇米伏射の競技で、畳一枚位の大きな板に中央を十点とする標的に対して射撃し、選手全員の合計点で優劣を競うものであった。岡田教官と教練教師の指導宜しきを得て四年連続の優勝をした。筆者も射撃部の一員として五年生次の優勝に一役買ったことを記憶している。また優勝祝いに射撃部員と教官とが雉狩りに行って、大猟の獲物を教官宅の前庭で炭火をおこし腹一杯喰べたこともあった。懐かしい想い出である。

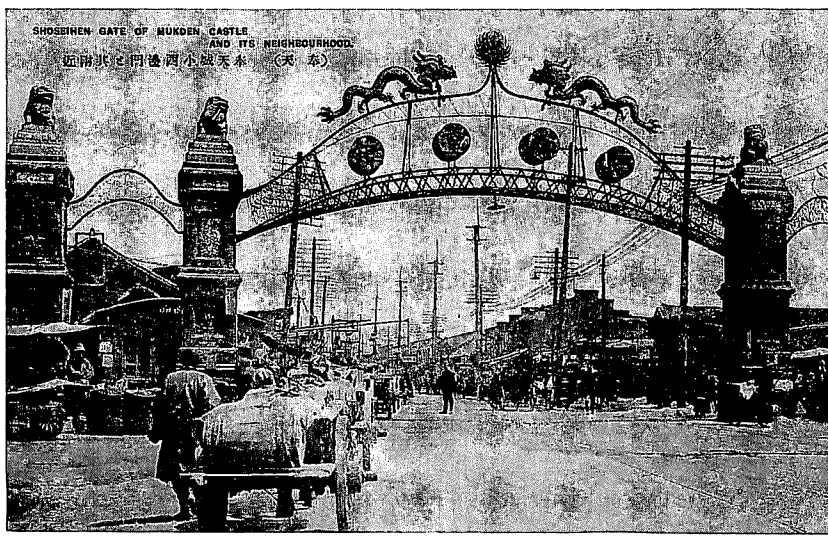
この辺で墓誌銘に反転し筆を進めたい。墓誌銘を書いたのは「辻本勝巳氏」で「史邑」は号である。筆者が中学で習字（今で云う書道）を習ったがそのお手本は辻本史邑氏が書かれたものであった。習字の教師から何気なく聞いたが未だに鮮明に記憶に残っている。私事で恐縮であるが筆者には三人の息子がいるが、上二人は県立奈良高で書道を史邑氏の弟子である平田華邑先生から教わったことも何かの縁と考えている。更に云えば史邑氏の御子息が寝屋川市で書家として一家を構えておられるが、「翔鶴」と号し毎日文化センターにおいても書を教えていられる。「翔鶴」とは、敗戦時わが帝国海軍の空母にあった名称であるが、その翔鶴氏とは筆者が奈良県庁において一時期机を並べて仕事をしたこともあった。更に縁の糸は続く。実は岡田中佐夫妻の次男茂孝氏が史邑氏の愛娘と結婚したことである。勿論墓碑銘の昭和十三年五月に、今は亡き史邑氏が書かれる時には及びもつかなかったことであろうが、廻り廻ってと云おうか、糸が繋がっていることは不思議としか思われない。

史邑氏の墨蹟は墓碑正面と左側面であるがこれらの墨蹟は正に墨痕淋漓、肉太である。之に対し裏面の墓誌銘は前記の通り片仮名交り文の楷書で、原稿用紙の桝目通りに書かれており文字に品格があり格調高いものである。

岡田中佐戦死は昭和十二年七月十八日である。中佐は四十四歳、妻カツ子は三十五歳であった。日付の十八日に拘わると、満洲事変の発端である柳條溝爆破が九月十

八日、偶然であるが十八日がひっかかって来るのである。戦死当時における家族構成等は後述することもあると思われるが、岡田中佐夫人カツ子が三十五歳の若さにして長女十五歳、次女十一歳、長男八歳、次男六歳（前述した茂孝氏である）の四人の子女を抱えて茫然自失、途方に暮れたであろうことは想像に難くない。しかもである。それから八年後、敗戦により一家の収入源である恩給がストップしたのであるから、物心両面にわたる苦労は並大抵のものではなかったことと一言附言しておきたいのである。何時の日であったか、中佐が生前に筆者に洩らした一言が忘れられない。「俺が死んだら後は御上（おかみ）が面倒をみてくれる」と。

話は一転して墓碑の採拓に移る。実は、墓誌銘を採拓させて欲しい旨カツ子夫人――以下「おばあちゃん」と呼ばせてもらう――に申し出たところ、危ないから止めておくように云われたことがあった。然しおばあちゃんが平成七年一月二十七日（淡路阪神大地震が起った十日後である）市内の病院で身罷り、かつ遺族からの希望もあったので、永慶寺住職の許可を得て採拓することとなった。採拓は何しろ碑が大きいので、家内と二人での作業



戦前の奉天（理瀋陽）城小西辺門附近

は到底無理で、三男が大和郡山市矢田町に住んでいるので協力を依頼し三人の共同採拓となった。三男の勤務日の都合があるので調整した結果、採拓は何と九月十八日（月）に行われた。秋分の日位になるとお詣りの人も多いので、その前にしようとした結果、記念すべき日と重なった次第である。脚立を組んで一番上に俊昭が立って筆者の云う通り一応採拓してくれたが、仕上がりはまずまずと思っている。正直な話字面（じづら）だけで約一八〇糎もある碑の採拓を採ったことが今までなかったが、天気晴朗なれども若干風が吹き採り難くかったことは事実であった。前述した岡田中佐の子女四人に墓誌銘の拓本を表装してお渡ししたいと思っている。

なおこの墓誌銘の筆者が辻本史邑氏と明刻されているので、誰が書いたのか改めて詮索する必要もないが、石碑の中には筆者が不明な場合がかなりある。私は碑文の出典筆者の外に誰が石を彫ったか石工（いしく）の氏名も欲しいことがある。この墓誌銘を採拓するとき石を彫ってからもう五十七年も経っているので、苔が生えていて採拓できないのではと心配して、束子（たわし）を持参して行ったが、碑面の文字はしっかりと彫られており、束子を使う必要が全然なかった。半世紀以上経っていても彫られた文字が正確に採拓出来るのは、使われた石自体の良さもあるであろうが、石工の腕前によるところ極めて大であると考える。その意味で石工の氏名を彫すべきであると想う。これに対し昔の薬研（やげん）彫りで彫られたものであれば、石工の氏名を彫ることに意味を認めても今日の機械彫りではどうかとの反論があるかも知れない。

因にこの墓誌銘を彫った石工は大和郡山市の大石氏であり、聞くところによると、辻本史邑氏の筆になるものの殆んどを彫られた由である。

後編

岡田中佐墓誌銘に記してある中佐戦死の日、即ち昭和十二年七月十八日当日、筆者は如何なる身分で、何処で、何をしていたか、と云うことから記述を進めたい。

当時、私は哈爾濱（ハルピン）学院の二年次の学生で、上級生の一人と興安北省新巴爾虎左翼旗（しんぱるこさ

よくき）のそれぞれの分駐所みたいな処でアルバイトをしていた。旗の公署所在地（県庁所在地と同じ）は阿穆古朗であって黒煉瓦造りの旗公署があった。蒙古地帯で煉瓦造りの建築物と云うと、それには意味があるのである。由来蒙古民族は草を逐っての遊牧を業とするから、土地に穴を掘ったり、建物を建てたりすることを嫌うのである。ラマ教の寺、即ち廟が唯一の固定建物である位である。当時は夏に入っていたので蒙古住民が羊の毛を刈る。その刈り上げた羊毛を特定の買い上げ機関――確か何々羊毛公司と称していたように思う――が羊毛の量目を正確に計量しているかどうかを監視する為に、我々二人をアルバイトとして雇ったものと考えている。分駐所みたいな処と云ったが、筆者一人に蒙古人の役人――この蒙古人はブリヤート蒙古（モンゴル）で、蒙古語は勿論ロシア語も話すことが出来る――と二人で一個の蒙古包（ゲル）の中で生活を共にし、羊毛の計量が始まると外に出て秤の傍に行って見守る仕事をした。一寸横道にそれるが、我々の飲み水は蒙古人の幹部級の者が柳の植えられている凹地に、筆者を連れて行ってこの場所を掘れと指した。そこを掘ると濁った水が地中から出て来た。未だにこれを記憶している。――と云うのも、その幹部に筆者が何かの折に「駱駝」と云った所、彼は頷いて、判った、わかった、と云う風に笑いながら、首を縦に振ったことがあるからである。彼には私の拙い蒙古語がやっと判る位であった。

私が居った分駐所附近は草がびっしり生えているわけでなく、どっちかと云うとまばらであった。多分私の歓迎の意味だと当方が勝手に解釈するわけだが羊を一匹連れてきた。家畜を大切にする蒙古人であるが、これは例のブリヤートモンゴルの役人の命令だったかも知れない。私に見せないように羊を殺した。心臓附近の皮を切り開いて、手を中につっこみ、心臓を握って圧殺する。感心したのは皮を上手に切り開いて、血液を一滴も外に流さずに皮の上に溜めた手際である。これは私が目撃した。他方羊の腸は羊腸と云って長いが、この端を切り取って水を流し込んで、中のものを出して水洗をする。皮の上の血液を上手に掬い取って、洗った腸の中に流し込む。横の方で牛馬の乾いた糞に火をつけて水をぐらぐらと沸騰させた中に先程の血の入った腸を入れる。茹で上ったところで湯から取り出して、適当の長さに小刀子で切り

戦前のハルピンのキタイスカヤ街風景

塩と一緒に喰べよと皿に盛ってくれた。蒙古に行ったら蒙古人から出された茶、食物はすべて飲食することが礼儀であり、先方もこれを歓迎してくれると聞いていたのでこわごわ食べた。云うならば羊の血のソーセージである。味はもう忘れてしまったが塩辛かったのではなかったか。次は内臓を茹でる。これも少し喰べたが肉はどうするか、興味を以て見たが細く切って天日干しにし始めた。かんかんに乾燥した肉は冬の食物らしい。

刈り取った羊毛を積んだ牛車が、何処から来るのかさっぱりわからなかった。あの平原の中、どうやって旗の分駐所まで来れるのか不思議であった。確かに平原地帯ではあるが高低差がある。彼等は優れた眼の力を有っている。或る日私は例のブリヤートモンゴルの役人に旗公署は何処に在るのかと聞いた所、彼は真面目な顔をしてこの方向と手を挙げて示めしてくれた。万事この調子で間違なく方向を定めて往来が出来るのであろう。

日常の起居動作であるが、朝は夜が明けたら先ず彼がごそごそ起きる。寝台はお互に戸板一枚で毛布か何か敷いていたように思う。確かとは記憶にない。私の方は口を濯ぐだけであるが時には省略する。朝昼晩飯はどんな

物だったか覚えていない。多分私は持って行った米を炊いたり、或は缶詰を開けたりしたのであろう。昼間は例のアルバイトで過すが、さてこれが何日間位続いたか。実は日もはっきりと記憶していないが私は下痢に悩まされた。持参した丸薬を飲んでも一向に効きめがないので、ブリヤートモンゴルの役人に旗公署まで連れて行ってくれと頼んだ。彼は私に対しては常に「バクシー」と呼んでいた。「バクシー」とは「先生」の意であるが、何処からか、見るからにおとなしそうな白馬に鞍をつけて引っぱって来た。「バクシー　これに乗って　一緒に行こう」と云って彼は自分の専用馬に跨がってトコトコ旗公署へ向けて歩き出した。私は今回の旅行前に輜重隊で乗馬訓練を受けて来たので軍用馬より小さな蒙古馬には自信があった。けれども私自身下痢で大分痩せたのであろうか、例の役人がおとなしそうな、否、老馬を連れて来て、「これに乗れ」と云う。そして手を挙げて示した旗公署の方へ――前方はただ起伏のある草原が見えるだけであったが――彼の後に就いて馬を歩かせた。

大分経って、平原の向うに黒煉瓦の旗公署がうっすらと見えて来た。煙突からの煙であろう遠くから見ても判った。旗公署の役人は酒井旗参事官以下日系、蒙古系、警察官を含めて十名程度居り、夫婦世帯の者も二・三おって、それらの奥さん方が炊事をしているわけである。その煙を遠望した時、ブリヤートさんに「パシリー　ポスカレイー」（早く行こう）と云って馬腹を蹴ったが、如何せん、老頭兒（ロートル＝老齢）の馬故、走るには走ったが競争馬の様にはいかない。漸く到着して参事官に事の次第をかくかく然然と報告し下痢止めの薬をもらった。

旗公署職員の机の上に新聞の束があった。活字に飢えていた私は早速にこれを開いてみたところ、次の記事が目の中に飛び込んで来た。「隊長岡田少佐以下十余名戦死傷す　有力な共産匪と交戦二時間半　白刃揮って斬り込む　奉天本社特電（十九日発）園部部隊発表　布施部隊の岡田〇隊〇〇名は十八日午前八時……」。その横に「岡田茂少佐」として写真が掲載されてあった。記事をたんねんに読むこと数回、茫然自失、全身の力が一ぺんに抜け出てしまった。記事の内容は略々墓誌銘と同様である。これは何をおいても四平街の岡田少佐の陸軍官舎に戻らねばならぬと決心をした。後で記述すること

もあると思うが、撫順中学五年の時満鉄社宅の岡田少佐宅に寄宿居候を許され、私がハルピン学院入学の時保証人となっていただいた方である。早速参事官に話し帰哈の了承を得た。然しである。新聞が発行されてから海拉爾（ハイラル）経由で旗公署まで届くには、一週間から十日位かかると云うことであるから、今から帰っても葬式には間に合うまい、もう一人の上級生との連絡に時間がかかる。旗公署から海拉爾まで数百粁の道程は、旗公署のトラックでなければ行き得ない等々から、翌日出発とはならなかった。

事の顛末を縮めて云うと、私が四平街の岡田中佐宅に到着したのは告別式が既に終った後であった。告別式は新聞によれば七月二十九日、四平街は素より満洲においても稀にみる盛大な式典であったとの由である。日時を正確に記憶していないので仕方がないが、ともかく着いた時は中佐の写真が床の間の高い所に飾られ、その下數段にわたって供物があった。一礼をするなり号泣すること暫し。その夜一泊したが、何の話をしたのか記憶にない。恐らく意識して中佐戦死の話を避けたに違いない。私如きが何を話せば良いのか。既に内地から夫人の実父、

戦前のハルピン松花江夏の風景

実弟が来られているので、翌日、早々にハルピンに戻った。何の力にもなれなかった事を内心恥じながら。

ハルピン学院の夏休みは六月十五日から八月十五日までで、内地の高専大学よりは早く休み早く始まる。夏休み終了後、夏期旅行報告会があり、私が蒙古旅行の報告をさせられるのでその準備の都合もあって、学院に戻らねばならないと内心申訳けない気持で一ぱいながら己の無力さを感じつつ学院に戻った。

以上で、墓誌銘にある岡田中佐戦死の日、即ち昭和十二年（一九三七年、満洲国康徳四年）七月十八日、私が哈爾濱学院の二年生で蒙古旅行をしていたと云うことについての記述を終る。

次は哈爾濱学院について若干説明したいと思う。何故ならば、ここで軍隊入隊前の三年間多感な学生々活を過したからである。満鉄の撫順中学卒業は昭和十一年（一九三六年、満洲国康徳三年）二月。四月には晴れて学院生となった。当時私は学院の寄宿舎――校舎の二・三階を占めていたが――月拾五円の寮費を払って満十八歳から二十一歳まで御厄介になったわけである。私の家の状態から云えば到底上級の大学や高専に行けるものではなかったが、中学卒業時の成績が良ったので満鉄の奨学資金財団から学資の援助を得る事ができた。満鉄の功罪について云々する人がいるが、この様な人材育成の事業も行っていたことは看過できない。哈爾濱学院には推薦入学制度があって幸に私は面接だけで入学することができた。私達の時には三種類の学生があった。先ず府県から派遣される府県費生である。クラスにも青森・福島・石川・岐阜・広島・山口・福岡の各県費生がいた。次は満鉄からの派遣生で、これは現に勤めている満鉄社員を選抜しての学生であってクラスでは三名いた。三番目が所謂私費生で私の場合を除いて入学試験合格組である。府県費生制度は哈爾濱学院の外、上海の同文書院も採っていたようである。

わが哈爾濱学院の三階上の壁にロシア語で横書に「インスティトウト」と書かれてあり、次の行に「一九二〇ヤポノルースカボ　オブシエストバ　一九二一ゴッド」と記されていた。つまり一九二〇年～一九二一年（大正九年～大正十年）間の日露協会の専門学校と云う意味で、看板は創立以来ずっとそのままであった。そして

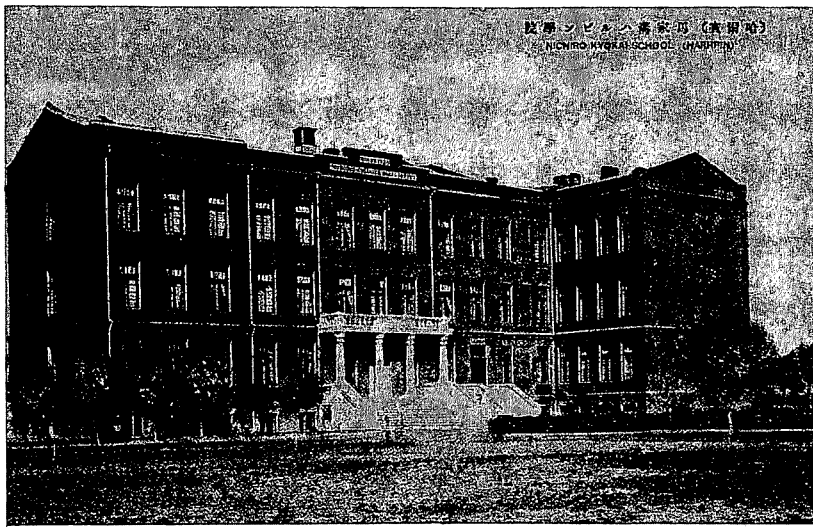
学院の入り口には縦約一米、巾約三〇糎位の金看板に、哈爾濱学院と墨書されたものが掲げられていた。「濱」は判っきりと「濵」となっていたことを記憶している。

さて哈爾濱学院は前記の通り、大正九年の九月哈爾濱に開設され、昭和二十年八月の敗戦により二十五年の校齢で閉じた。右の期間はシベリヤ派兵の撤収即ちロシア革命成就の時期に始まり、今次大戦の終末期ソ聯軍の満洲侵寇時と同じである。学院は草創より昭和八年（一九三三年）までの十四年間が「日露協会学校」、それから七年後の昭和十四年までが「哈爾濱学院」、次に昭和十四年（康徳六年）四月から敗戦までの七年間が「満洲國立哈爾濱学院」となった。私の学んだ哈爾濱学院の名称は七年間続いたわけであるが、学校の名称が「哈爾濱　哈爾濱学院」となっていたことは卒業時に受け取った卒業証明書で判ったが、こんな名称の学校は今まで聞いたこともない。ただ同文書院が「上海　上海同文書院」と書かれてあったのを何処かで見たことがある。

◆ 学院長のこと

私共第十七期生入学時の時の学院長は三沢糾氏であった。三沢院長は私共入学の前年昭和十年三月着任され、私共卒業の前年昭和十三年退任され、代って陸軍中将の三宅一夫氏が着任された。三沢院長は痩軀鶴の如き文字通りのジェントルマンで外柔内剛所謂リベラリストであった。京都帝大の学生課長、台北高校の校長の経歴があり、私共は二年生の時に一回先生の臨時講義を受けた。院長は原稿なしで言語荘重「母の愛」について、これを至高のものとする意味の講義をされ、クラス全員粛として感銘を受けたものである。

昭和六十二年ＮＨＫの朝ドラ「はっさい先生」というのがあった。「実録　はっさい先生　知られざる教師たちの物語　著者奈良教育大教授上沼八郎」という本によれば、「はっさい先生」を大阪府立高津中学校に呼んで来た校長の伴九郎こと虚像のモデルは、三澤糾氏が実在の校長であった旨書かれてあり、私もこの本で始めて院長の歩んで来られた途を教えられた。我々一年生が夏休みを終へて授業再開された際、後で知ったが学院の高給の三教授が院長によって退職させられ、上級生がストライキを構えたが不発に終った由。これは少くも私は全然知らなかった。学院の財政厳しいものがあったのであろ



戦前のわが母校ハルピン学院全景

う。後任に尾上（法学）、松山（経済学）、清水（露語）の少壮有為の若手教授が着任した。

◆ 第一学年時代

色々と書きたいことがあるが、語学――会話教育法の神髄を申したい。

我々ロシア語について何も判らないものが夏休み開始の六月十五日前に、例えばキタイスカヤに出てロシアチョコレートをロシア人の店で買うとか、その他土産物を買うについて、高いから負けてくれとか云う様な会話が出来たのである。

一週三十六時間のうち二十二、三時間以上のロシア語漬けである。就中会話は随分鍛えられた。忘れ得ない先生に、女教師のポドスタービナさん、また男性教師のウリヤニッキーさん――我々はこれら先生を、ポドさん、ウリさんと呼んでいたが、ウリさんの教育法がまた別してユニークである。我々学生の机の上にインキ壷が置かれているが、ウリさんは、私に「これは何ですか」と問い、「インキ」ですと答える。すると、「バッタナベさん　貴方はインキを飲みますか」とインキを早口で問う

て来る。当方はまさか、インキを飲むか、と人を馬鹿にした様なことを聞く筈がないと思うので、水かなと適当に判断して、「はい、飲みます」と答えようものならクラスの全員に向って、「皆さん聞いて下さい。バッタナベさんはインキを飲むそうです。どうぞお飲み下さい」と大声で云う。当方はしまったと顔を赤くするが後の祭り。クラスの一人ひとりにこの様にして「鉛筆を喰べるか」とか、「ペン軸を飲むか」とか質問をして、云うならば耳の訓練をするわけで間違った方は印象深く覚えることとなる。

日本語のラ行の発音はロシア語にもあるが、舌の先を上あごにつけて、ラ行の発音を教えてくれたのはポド先生であった。

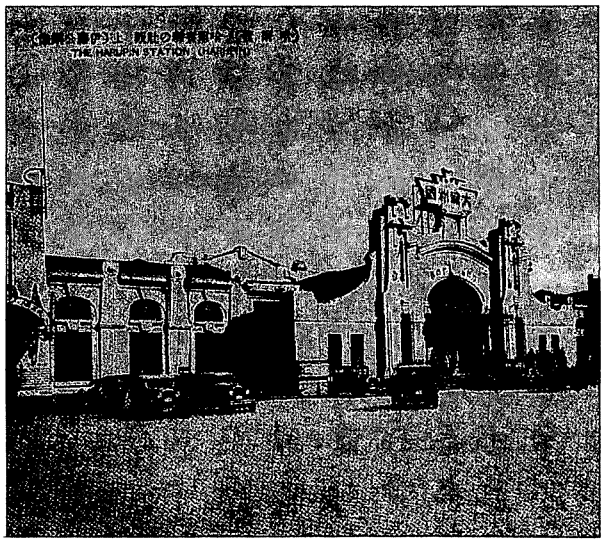
二学期位と思うがウリさんから、何日にゲネラール・ウエダが皆さんの授業を見に来るので勉強しておく様にとのお達しがあった。「ゲネラール・ウエダ」とは当時の関東軍司令官植田謙吉大将のことで、来校の日ウリさんの授業視察があった。ウリさんは私にテキストを読ませて質問したが、無事答えると「ハッラッショー」（宜しい）と云ってくれた。ウリさんの顔がたったわけである。

寮生活では何と云っても寮の飯ということになる。朝食は黒パン白パンに紅茶（これは薬鑵に入っていて砂糖はザラメ）と、バター一切れか片目（卵一ケを焼いたもの）位でチーズはなかった。昼食は中華かロシア料理、夕食は大体和食であった。寮生活で書き出すとキリがないので是位に止めて置くことにする。

◆ 第二学年時代

学院創立時はともかく、我々の諸先輩の時代には夏期休暇に研修旅行として、若干の補助を出して学生に北満、蒙古、三河（さんが）地方に赴かせたことがあったようだ。二年生に成り立ての頃、三年生のK・Tの二名（十六期生）に誘われ、更に三年先輩のY氏が同行するということで、北満の呼倫（ホロン）湖と貝爾（バイル）湖を牛車で周遊するという旅行を行うことになった。時は昭和十二年（一九三七年　康徳四年）六月下旬――一年後に張鼓峰事件、二年後にノモンハン事変が始まると云う時である。ハルピンから先ず西方の満洲里（マンジュリ）へ行き、ここから南呼倫湖を目指すが、新巴爾虎右

翼の旗公署を第一の到着点とし、それから東南の新巴爾虎左翼旗公署を経て、海拉爾（これらの地名は中國の地図でも、蒙古自治区内の旗として使用されている）を通ってハルピンに帰えるという計画である。計画が大甘で、



戦前のハルピン駅

よくもそんな大それたことを考えたものだなと後になって思ったがその時は大真面目であった。Y氏が当時蒙古政部の役人であった関係もあり、右翼旗々公署で牛、牛車その他必要物資を調達したがたった一晩だけが楽しい夜であった。乾燥した牛糞を集めて火をつけ、所謂キャンプファイヤを囲んでの談論風発で大いに盛り上った。然しである。翌日からの行程で水不足からか牛が動かず、遂にストップ。Y先輩と三年生が救援を求めて、当日開かれているオボ祭に向けて出かけることとなった。K生と私が居残って牛車の下にもぐり込んで、愈々これで一巻の終りかと悲壮な気持になったものだ。蒙古地帯にも雲雀がいるものだなと思い知らされたのは、もぐり込んだ牛車の直ぐ傍をピョンピョン雲雀が跳んでいたのを見たからである。まあ云うならば半ば助けを求めながら、半ばここで死ぬのかと色々と思い悩んだ。やがてトラックの音がして車上から、ニヤニヤ笑っている人の顔があった。今記憶していることはその位のもので、印象深かったのは、蒙古人が石油缶の半分位なものに水を容れて牛にやった時、牛が息もつかずにぐいぐい呑んだことである。こうして我々蒙古旅行団は九死に一生を得て助かっ

た。トラックに載せられ、オボ祭の現場に行き左翼旗に我々がバトンタッチされた。オボ祭で蒙古人の角力や弓の試合を初めて直接見ることが出来たことは幸運であった。我々はオボ祭の終了と共にトラックに載せられ左翼旗公署に到着した。それからのことは前編の墓誌銘岡田中佐戦死の日に続くわけである。

二年生になると云うよりも、一年の夏休み後位から殆んどの者がロシア人宅に下宿を始める。月拾円の下宿料で偶には紅茶も御馳走になる。入れ替りに二、三年生が寮の空き部屋に入って来る訳である。

次にラグビー部が尾上教授の発案で出来たが、私も一年先輩（同じく撫順中学出身でラグビーの選手であった）から誘われ入部、ポジションはスタンドオフ。全国高専大会の満洲代表を目指して、大連の南満工専と戦って勝ち、大阪花園まで駒を進めたが一回戦で秋田鉱専に破れた。

二年生では蒙古旅行とラグビーが想い出として残る。

◆ 第三学年時代

昭和十三年（一九三八年、康徳五年）に入って前述した通り、三沢院長が退任され予備役陸軍中将の三宅一夫氏が就任された。前年秋に満洲における日本の治外法権撤廃と満鉄附属地行政権移譲に関する條約が締結されたが、名実共に満洲国行政が全土にわたって施行されることとなった。私も最終学年であり、将来満洲国政府か、満鉄位を目標に考えるようになった。夏休み位から満洲国政府の高等文官考験（日本の高文制度に倣ったもの）があり、これに合格すれば大同学院に入学できると云うことで、第一回の公募試験が実施されることを聞いた。夏休みには例の研修旅行があり、松山教授と当時の中部蒙古地帯の大板上に向ったが生憎大雨に遭い、所期の目的を達せず引き上げて来た。満洲国の試験の準備もあるので、八月に新京（現長春）の北部部落でロシア人宅に一ヶ月籠城することとなった。

学院生活三ケ年でロシア人の家に寄宿するのがこれが初めてで、ここの主人は満洲中央銀行の警備員をしていたように思う。受験科目の中で、苦手の民法は我妻栄の著書、また経済学は高田保馬のものを勉強したが、受験結果は惨々たるものであった。ロシア語は多分ソ聯の党機関紙「プラブタ」か、政府機関紙「イズベスチヤ」か

らのものだったと思うが、これはまあまあ翻訳出来たと思った。九月下旬に合格発表があり一息つくことが出来た。当時の満洲国の情勢等からロシア語の出来るものを合格させたものと思う。

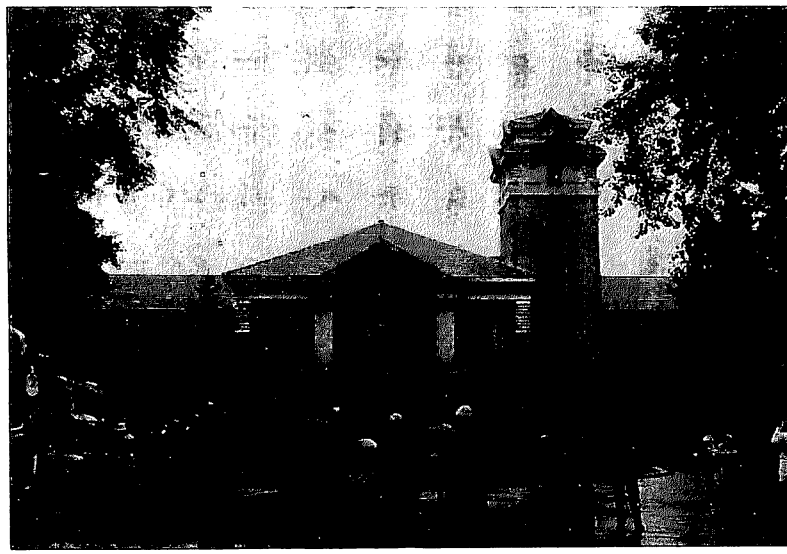
卒業式が三月にあったが卒業生四六名。学院の卒業式で特色あるのは卒業生答辞が日本語、ロシア語、第二外国語の支那語及び蒙古語で行われることであった。式には来賓としてソ聯邦代表としてハルピンの総領事が一席祝辞を述べたが、声が低く何を云っているのか判らなかった。ただソ聯邦を「セセセール」と云ったように覚えている。蛇足を附け加えれば、ソ聯は「ソヴエート社会主義共和国連邦」と云う長たらしい名前で、ロシア語のC＝英語のSで、連邦のC、ソヴエートのC、社会主義のCに共和国のP（エル）で、CCCPを続けて読むと「セセセール」となる。CCCPはおなじみのバレーボールの試合などテレビでよくお目にかかった。

卒業式終了後大同学院入学者が四月上旬東京の日本青年会館に集合を命ぜられているので、色々準備を整え日本内地向けに出立したが、途中奈良に立ち寄り、大和郡山市永慶寺の岡田中佐之墓に、卒業と大同学院入学の報告を兼ねて墓参を済ませた。

以上で哈爾濱学院三年間の青春物語を終ることとする。

◆ 大同学院のこと

昭和十四年（一九三九年　満洲国康徳六年）四月に第一回満洲国高等官採用考試（試験）合格者が高等官試補として、東京の日本青年会館に集合を命ぜられた。当時の語を以てすれば、日鮮漢満蒙系（白系露人はいなかった）一四六名である。大同学院官制によれば、その第一条に「大同学院ハ国務総理大臣ノ管理ニ屬シ　中堅文官ヲ養成訓育スルヲ目的トス」と定められている。直ちに班の編成が行われ、制服の協和会服の支給があった。私は第三班に属したが、総員八名、日系五名、鮮系一名、満系二名であった。因みに日系は京大法、東北大法、東大土木、熊本工専に私。鮮系は水原高農卒、満系はいずれも奉天農大卒で、私が最年少の二十一歳であった。引率者は中井学監と吉井教官で我々の意志疎通、融和に意を用いられた。東京では明治神宮に参拝、三日間の禊には驚いたが、我々日系よりも満系の方が難行苦行となったのではないか。それから静岡県函南（かんなみ）村で



戦後訪れた元大同学院（現吉林工業大学）

農家に合宿したが、これは我々が満洲国内での農村実態調査の前ぶれであったろう。奈良では橿原神宮で紀元二六〇〇年を控ての神宮整備の最中で、専ら「もっこ」かつぎの勤労奉仕をした。広島では江田島に一泊し海軍兵学校の朝の起床動作を見学した。京城では昌徳宮その他の朝鮮文化財を尋ねたが、同室鮮系の御家族から豪華な朝鮮料理の御馳走に預かった。漸くにして新京に到着したが、二週間もたたぬ間にノモンハン事件の勃発があり、我々は新京の都心部高所で防空監視の任に就いた。

学院の主要行事である農村実態調査が開始され、私は渾春方面の班に配属され、調査に当っては満系諸君の通訳が頼りであった。電燈はおろか、便所もない農家で農民と同じ屋根の下で同じ食事をしたことが、口舌の教育でない実物教育であったと思う。また秋には全満旅行があってホロンバイル班、熱河班、虎林班等に区分され、私は哈爾濱学院の時の古戦場（？）であるホロンバイル班に参加、海拉爾では荻須立兵軍司令官からノモンハン戦が苛烈な戦闘であった旨話を聞いた。また海拉爾から北方の三河

地方で白系露人の農民宅に宿泊し、その生活振りを見学することが出来た。

満洲国の国是である「民族協和」は恐らく永遠の課題であり、此岸から彼岸に見る大きな柱であろうが、一民族が他の民族を支配することが不可能であるとすれば、民族と民族の協和しかあるまい。それを打ち樹てて行くのは我々若人しかない。「大いなるかな満洲は」（大同学院寮歌第一節冒頭）、「無我至純なる若人の天翔けるべき天地なり」である。そして、「起ちて理想の旗の下協力必死　東洋に自治の楽土をうち建てん」を実践目標としたのであったが、志成らず満洲国は十四年にして滅亡した。

私は哈爾濱学院在学中徴兵猶予を受けていたが、大同学院ではその特権もないので昭和十四年八月位に徴兵検査を受けた。第三班では日系のうち私を含め四人が受験したが、いずれも第一乙種合格で来年早々にも入隊することとなった。十二月になると入隊通知を受ける日系の者が出て来るので、学院では急遽学院卒業を十二月一日に繰り上げ実施した。その頃になると入隊までの配属省庁が定められ、私は国務院総務庁地方処財務科勤務となった。我々第十一期生のうち日系で軍隊入りが確定してからは、土曜日と日曜日の夜は軍資金がある限り送別会の連続であった。所謂酒を呑んでの高歌放吟である。

以上で、「わが青春の記」を終ることとするが、読み返えしてみて一言追加して締めくくりとしたい。

私が哈爾濱学院の時、呼倫貝爾蒙古旅行をした際、新巴爾虎左翼旗公署に救助されたが、その際お世話になった酒井旗参事官の活躍に大いに影響されたと今にして思うのであるが、満洲国政府の一員として、将来その第一線に立ち、辺境の地にあって満洲国住民の為に骨を埋めたい、それが満洲に育った日本人としての勤めであると考えていた様な次第である。格好をつけた言い方であるが、それがわが青春の理想像であった。

なお、本稿の中に出て来る地名を別添「満洲国全図」の中で特記しておいた。

（平成八年三月十二日　記）

【短歌】

旅

網干善教

咲きほこるラベンダの花匂いけり　紫に染む富良野の丘は

神秘なる静寂の水に山うつり　然別湖の朝あけのとき

それぞれの願をこめて湖に　流し燈籠のあかり並びて

さわやかな夜ふけの宿の庭に見し　然別湖の白き蛇姫

霧しぐる十勝の麓鹿追の戦車に乗りて若き日想う

果てしなく草木繁し最北の　釧路湿原冬鶴が居て

六月の蒼き海原夕なぎる北方領土の浮ぶ根室は

洋上に学ぶ若人の船ゆく手国東の山　紅の立つ海

小夜ふけて涼しき風の吹く船の　上にあかりあり瀬戸の大橋

ガラス吹く青白き炎見つめつつ　汗する匠(たくみ)民芸の館

山百合

荒居智子

身を越ゆる刈草を負う青年の手にたわたわと白き山百合

身籠りし子が時かけて駅階段のぼりてゆくに靴の裏みゆ

春の雨さけて入りたる海際の茶房にスプーンの音の響きつ

囀(さえず)りて雲雀は雲に入りゆくか乳母車押す坂道ゆるき

雨の降る馬籠(まごめ)の宿の軒深く赤く灯して人影うごく

春は来るらし

宇野木久代

白毫寺の五色の椿奈良町を見守り咲きて四百年たつ

寒菊の小さき花はきそい咲くおくるる一つ吾れに似ており

いつしらず春は来るらし庭に町に昨日の蕾み今日はひらきおり

細雪ふりあれて今日啓蟄か虫も驚き土にもどらむ

傘だけが座席に残され発車せり主(あるじ)ホームで手を振りており

ほとけの

大浦小枝子

ほとけ様どうぞ此処へとほとけのざ薄むらさきに野の面はなやぐ

ホントハネ　太古いのちの生れし海に散骨されて戻りたいだけ

鮭の持つ回帰本能と同じかも太古いのちの生れし海恋ふ

鉤針を使ひ始めて編みし子のマフラーの中ジグザグつづく

保育園で造りし五組の雛達も泣きベソ顔で段飾りに座す

早苗のふくさ

岡田越子

菅(すが)の月満てるを待ちて茶をたてる文化協会の宴となりぬ

千三百五十年前クーデターの資料片手に飛鳥をしのぶ

信楽にてくがれし花入れもとめたり佗を味はふその「うづくまる」を

勅題の早苗のふくさ買ひ求め初釜にゆく心は早苗

額のごとガーデンホテルの大窓越しに今を盛りと桜の浮き立つ

春めぐりきて

片桐一夫

青丹よし平城の宮跡西の苑香りも清しく梅の花咲く

我が里の外面に生えし花みづき日毎に芽ぶく春は来にけり

新たしき緑の風吹く春の野辺七草摘みゐる幼らの聲

麗しく南の丘に李花咲きぬ七き師兄偲ぶ春めぐりきぬ

ジュ（我）パンス（思ふ）ドンク（故に）ジュ（我）スイ（在り）のデカルトの哲学学びし梨花咲く窓辺

イタリヤ追想

木庭和子

聖像の石の文化の壮大にたじろぎて立つサンピエトロ広場

ポンペイの廃墟の町の邸あと〝猛犬注意〟のモザイクの犬吠ゆ

中世に生きし人らの魂の凝るドウオモの尖塔天を目ざせり

塔の町サンジミニアーノのイースター鐘絶えまなく広場にひびかふ

マンジャーレカンターレアモーレお国柄映して旨しオリビエイトクラシコ

山茶花の紅

沢田実子

朝な夕な青虫取りし梔子の薫り始めし一枝生けむ
雷鳴のはるかに轟きさわさわと雨待つ木々の葉ずれ聞こゆる
日照にも耐へて芽吹きしこぼれ種狭庭にやさしきコスモスの紅
秋ふかみいよよ幽き虫の音を一人さめゐて聞くはかなしき
窓拭へば山茶花の紅冴へ冴へと風邪に籠れる思ひひろがる

春のメトロノーム

玉置小代

今朝の夢に淋しく小さき母がゐる早く出会ひて告げたきことあり
病む母の眠れる顔に憂ひあり生きるも別るもかなしと思ふ
時ふれば胸うち語る日もあらむ別れきし吾れに雪ふりしきる
屋根を打つ雪どけの音可憐なるメトロノームとなりて響けり
見上ぐれば庭の紫木蓮咲き初むるありやなしやの雨をまとひて

一九九五年

中川都哉子

五十年忘れ得ざりし大陸の土ふまんとて今宵海越ゆ
毀たれゆく土塀のかたえ秋天に鉄骨そびゆ北京の街は
朝まだき空港行きのバス停に待ちいる人ら地べたに坐る
家族寄りて丸きちやぶ台かこみたる昭和ひとけた今ははろけし
卵ふたつ持つ指先に早春の気配のありて窓すかし見る

駅が動いた

藤原呑

老齢の友を見舞えば一人居の家の隅隅くろ光りして
車中にて「駅が動いた」と幼き声「発車だ」と教う若き父親
捨て難き想い出の品前にして今日も整頓遅遅とすすまず
くどくどと老の挨拶笑顔にてしっかと受け留む若き住職
それぞれの家庭背負いし若き人我に教うる言葉持つ子も

母へ惜別の歌

松村　せつ子

看とりせば笑顔で応えし母なれど余命医療に頼る他なし

また明日ほほずりをして帰り来ぬその夜黄泉路へ逝きましし母

初七日に姉妹揃いて母の部屋それぞれ胸に思い出秘めて

梅の花咲くを待たずに逝きし母丹精こめし盆梅ひらく

顔みたし声聞きたしと思えども今は亡き母春の日虚ろ

平和を祈りて

森田　陽子

寺の磴　下れば薔薇の香り満ち迦陵頻伽を聞く思いする

濃く淡き紅葉も彩(あや)に一休寺　友撮りおれば朱に染まるがに

平和なる年祈りつつ柊にクリスマス飾りの鐘　結びゆく

賀状受くる手にふと触れて山茶花のうす紅色の花むらゆるる

蔵王堂　吉野の花を訪ぬれば三十年(みそとせ)を経し亡父(ちち)の面影(かげ)　顕つ

みちのくの旅

山崎　たみ子

『雨ニモマケズ』の詩碑建つ丘より見はるかす青田に農夫の賢治まぼろし

宝徳寺　ここを追われし啄木の悲しみ如何にと境内に佇つ

拙くも親の祈りの深さ知る野口英世の母の手紙に

芭蕉の句茂吉の歌にえがき来しそれよりはるかに大河最上は

八月半ばみちのくははや秋の空蔵王の稜線際立ちて見ゆ

船團出漁

綿源瑛子

朝夕に船のエンヂン聞えたる旧居思出ず海なき奈良に

暁闇の港にエンヂン音充ち満ちて船團百隻一齊に航(た)つ

舷のこすりあふがに密集し船團エンヂンフルにひた航(ゆ)く

全速力大漁の期待に逸り立つ船上漁夫の動き劇しく

先頭の漁船遥かに波を蹴る後尾の船はいまだ港内

【随　想】

ウソ（諺）ほんま

川口　勇

三　筆

平安時代の初めころも、奈良時代にひきつづいて書道が盛んでしたが、そのころりっぱな字を書いたことで有名な嵯峨天皇・空海・橘逸勢（たちばなのはやなり）の三人を「三筆」といっています。この三人が称揚されたのはずいぶん古く、すでに十二世紀の本「江談抄」にこの三人がならべて書かれていますが、「三筆」と呼ばれるのはずっと後で、江戸時代の貝原益軒の「和漢名数」（一六七八年）に初めて見られるところであるといわれています。

三筆のひとり　空海

――わが国における書の第一人者――

ご承知の通り空海は弘法大師ともいい、わが国古今を通じて書の第一人者でありました。また、中国から真言宗を伝え、高野山（金剛峰寺）や京都の東寺（教王護国寺）を開くなど、信仰の上でもきわめて偉大な人でした。たとえば伝教（でんぎょう）大師とか、見真（けんしん）大師など大師号を賜った名僧はたくさんいるのに、現在単に大師といえば弘法大師をいうのは、また太閤とは摂政（せっしょう）また太政大臣（だじょうだいじん）の敬称であるに単に太閤といえば豊臣秀吉をいうのと同じです。

――「弘法も筆のあやまり」ということわざがあります。弘法さんでさえ書きまちがいをするという意味です。

――ある時、空海が平安京の応天門に掲げる額の字を書きました。ところが、門に掲げてから、書いた字がまちがっていて点が一つ落ちているのに気づきました。弘法さんはゆうゆうと墨をすらせて、たっぷり筆に墨をふくませ、その筆を下からパッと投げ上げたら、十何メート

ルも高い所にある額の、その書き忘れた点に的中して、りっぱな正しい字にでき上がり、集まった人々はアッと驚いたというのです。

でたらめはなはだしい話です。そんな大事な額の字を書く場合にまちがうはずがなく、また「応天門」の三字には書き落すような点が考えられず、さらに書きっ放しで額にして掲げることはほとんどない。弘法さんともあろう人がそんな曲芸じみたことは決してしないなど、これは多分に、おおやの隠居が長屋の八つぁん・熊さんにするたぐいの話です。

――「弘法は筆を選ばず」ともいわれていますが、弘法さんはどんな筆でもうまく書けた、ぐらいの意味ならまだしも、筆のよしあしには無とん着であったという意味にするなら、これもまた大まちがいです。りっぱな字を書く人ほど、筆のよしあしや適不適には気を使うはずです。

弘法さんを「五筆和尚」ともいいます。両手・両足と口とで筆を五本持って、一度に五通りの字を書いて見せたのでこの名があるといわれています。これも前述の応天門の話と同じように、全くでたらめで、五筆とは、楷・行・草・篆・隷の五つの書体をりっぱに書かれたのが本当らしいです。

空海はあまりに偉大であったため、このほか「弘法の松」とか「一夜づくりの何」とかなど、全国にたくさんの伝説が残っています。

空海が書いた作品や書いたといわれるものは、たくさん残っています。そのうちで最も有名なものといえば、

（現在ある場所）

風信帖　京都　教王護国寺
灌頂記　京都　神護寺

（「灌頂暦名」ともいう。）　など

「風信帖」は、空海が最澄に送った手紙を三通あつめて一巻にしたもの。

「灌頂記」は、弘仁三年（八一二年）から翌四年にかけて、空海が高雄山寺で灌頂という仏教の儀式をうけた人の名などを書きつらねたもので、最初に最澄の名も見られます。改まって書いたものではないのに実にりっぱです。王羲之の書きぶりですが、顔真卿の影響も見られます。

【随　想】

方　言

廣田好實

標準語オンリーの旧植民地で、ぼくは成長期を過ごした。内地（日本本土のことを、外地住まいの者はこう呼んだ）の人の生活実態に触れる機会はほとんど無かった。だから――なのだろう、帰国後、各地で接する各種各様のお国なまりに、ついつい聞き耳を立てる習慣が身についてしまった。

敗戦直後、ヤミイチで混雑する大阪・梅田に立った。満員の市電めがけて、わきの中年男が不意にがなった。

「オカン、乗ったケーッ」

度肝を抜かれた。関西育ちの友がその場で解説してくれた。「泉州弁や。標準語に直すとこうや。『母さん、無事に乗れましたかあ？』。親の身を案ずる子の真情の発露やさかい、驚かんかていい」。それでも悪寒は残った。

近所に大阪の大学へ通う孫息子が住む。母親をときおりオカン呼ばわりする。しかっても効き目ゼロ。いま、悪寒は走らなくなった。

×　×　×

ぼくが勤め終えた新聞社は転勤、遠隔地出張がやたらだった。ぼくの場合、三十余年間に十一回任地を異にした。大阪、京都を別にして大半は九州だったが、取材対象により北海道へ飛び、四国へ走ることも再々だった。その先々で土地の方言を楽しめた。

少年期、母から聞いた話に、こんなくだりがあった。「新婚旅行、内地だったのよ。あちらこちら回って楽しい思い出いっぱい。佐賀でぇ、お父さんのたばこが切れたの。わたしが買いに走ってぇ、お店の人にたばこ下さいと告げると、返ってきた言葉は『なーい』。ここにございますでしょと言っても『なーい』。あきらめて戻ると宿の人は大笑い。あの地方では返事の『ハイ』が『ナイ』

に化けるんだって……」

佐賀支局着任時にこの話を思い出し、古老に尋ねると「いまは廃れたが、確かに使われていた方言」との返答。当時の母のうろたえようがしのばれて心和んだ。

カゴンマ（鹿児島）でローカル列車に乗った。行き先は元関取・霧島の生地。目的地が近付くにつれて乗客の交わし合う〝日本語〟が、魔術師のように〝外国語〟に移行してゆく。一語も理解できず、そばの小学生に通訳を願って多少了解。感嘆詞のあれっ、まあ!!が「ウンダモシタ!!」かわいい（可愛い）が「ムゾカ」とは知るよしもがな！だった。

宮崎の酒友は、流行歌詞を宮崎弁に置き換えて歌うことを得意とした。「静かに咲いて……」が「じわーっと咲けて……」に変化した。彼と飲むと、酒がじわーっと効いてくるのが神秘的だった。

横浜族はヒの発声が苦手らしく、ぼくの場合よく「シロタ君」（ヒロタが正解）呼ばわりされたが、博多ではドの発音に〝弱い〟男にかなり出会った。

博多弁には「どげんしんしゃったと?」（どうかされましたか?）が示すようにドで始まるお国なまりは多い。弱い男たちは、それらは無難にこなす。が『角のうどん屋でうどん食って戻ろう』と紙に書いて読んでもらうと本性暴露。何度繰り返してもらっても「カロのウロン屋でウロン食ってモロろう」となる。セルロイドは「セルロイロ」。はて、どんな色だったかな？　とテストした側が首をかしげる仕儀と相成る。

×　　×　　×

広辞苑の方言の項に、社会方言の四文字が見える。言語学に疎いから的外れかもしれないが、俗にいう隠語が含まれるとしたら、そこにも思い出がある。

ぼくは駆け出し時代、国鉄（当時）京都駅と七条警察署を持たされた。ちなみに、駆け出しとは新聞業界用語で新参記者を指す。キシャの一歩手前だから「トロッコ」とも呼ばれた。

ある日の早朝、警察へ顔を出すと署内の動きが慌ただしい。一人の刑事（でか）が「飛行機、飛んでもうたんや」と一言ささやいて跳んで出て行った。なにっ、航空機事故？が、消防へ問い合わせると「救急車、消防車ともに出動要請なし。目下のところ異状ありません」。

結果――はこうだった。ささやかれた言葉はすべて当時の刑事仲間にしか通じない特殊用語、つまり「留置中の容疑者（飛行機）が脱走した（飛んだ）」だった。飛行機は間もなく無事舞い戻り、一件落着した。

もともと暴力団組織下の隠語だったネタ（種＝たね）やばい（危険）ずらかる（逃げる）などはテレビ、携帯電話の普及率に比例して一般常用語化してきている。逆に、女子学生たちが愛用する〝符丁語〟は、はやりすたりが余りにも激しくて「社会方言として残るには短命にすぎる」との見解がある。

× × ×

いまどき、なぜそれほど方言にこだわるのか？　って。訳がある。動機を書こう。

文化協会の松岡禮一副会長が主宰する『万葉講座』に通っている。同教室で今春「万葉集にも方言が用いられている」ことを知った。ややこしい上にややこしかったので忘れられない。

駿河の国の防人（さきもり）の歌とされる次の一首（巻二〇・四三四六）はその一例。

知々波々我（ちちはは が）　可之良加伎奈弖（かしらかきなで）　佐久安礼天（さくあれて）

伊比之気等婆是（いひしけとばぜ）　和須礼加祢豆流（わすれかねつる）

今様に直せば「父母が、頭かき撫で、幸くあれて、いひし言葉ぜ、忘れかねつる」となろうが、ルビ横の●印部分はどうやらこの時代の駿河のお国なまりを映し込んで詠んであるという。つまり佐久安禮天は「幸（さき）くあれと」、気等婆是は「言葉ぞ」の方言とか。

だとすれば、全国に共通する標準語もあったのだろうな！　やはり、みやこ人のみやびな言葉遣いが標準だったのだろうか？　などと思案を巡らせ、ロマンをもてあそぶうちに時は過ぎてゆく。

あれかこれかでなく、あれもこれも学ぶことのできる今の老後が心地よい。かなうことなら、もう少しお邪魔になってみたい。

【所感】

――あしたへ祈る――

木村長子

早いもので、あの阪神大震災から一年が過ぎました。どんなに衝撃的な事柄でも歳月の前には、人間は徐々にそれらを忘却してゆくように出来ています。そうでなければ、とても正常では生きてゆけない世の中ですから――。

どこにでもある風景のように、震災前の阪神電車を利用していた通勤者は居眠りをするのが、日本人の特権でもあるかのように、気持ち良さそうに舟を漕いでいる乗客で一杯であったと言います。

しかし今、神戸に帰る電車の中で眠っている人は余りいない。それはムンクの絵に画かれた人物像のように眼は開いたままで、一人々々が物思いに耽っているというのです。阪神間を走る電車は悲しみを運ぶ列車なのです。

この三月いっぱいで公共施設の避難所は一斉に閉鎖と聞いています。それにはそれだけの理由もある事ながら、現実に行き場のない、まだ二〇〇人以上という被災者の人達はどこへ行けばいいのでしょうか。

遠隔地に建てられた被災者用のプレハブは余りにお粗末すぎてとても最低の生活にも堪えられないときます。日本という国は、これらのどうしようもない天災の人達への援助もままならない程に貧しかったのでしょうか？

住専のためには躍気になって国民の血税までも注ぎ込む活力があるなれば、せめてその熱意を持って未だに苦しんでいる被災地の人達にも、血の通った政治を施してほしい。その中でも豊かな階級の人たちは、冷やかな国是の援助を待たずして、自力で再生の路を切り拓いてゆけますが、それの出来ない立場の人達も数多くいるのです。このような瓦礫の中に必死に活路を見出そうと努力している人々にこそ真剣に耳を傾けてほしい、真の民主政治とはそんなことではないのでしょうか。

自分自身が無力な故に、何一つこの人達に報いる術を持たないけれど、

○爪くろき被災者われら整然とパンを待ちつつ相いたわりぬ

○思ったよりひどいと視察した人よ僕は日本が沈むと思った。

こんな切実な被災地の人達の詩心に接すると、流れ出る涙をぬぐい得ない。突然の天変地異の中にあっても温かい隣人愛と、確かな理性を持ち合わせていた阪神の同胞よ！

被災地の人々を襲った運命は、また明日の私たちのそれでもあるのです。

水仙月のこの季節、あの震災の中にも瓦礫を割って咲いていたという水仙の花。

とても辛く哀しい思いで、私は今年も水仙の花を眺めています。

（「私の雑記帳」より――）

三度、赤道を越える

島田　仁

(一)、英語講座に有難う

平城N・T文化協会の英語講座に参加させて戴いてより、二回目の正月も過ぎて、講座に磨きのかかる春三月に私は、海外への出向となり親切にして戴いた鎌田先生はじめクラスの皆様に、お別れを告げる事となりました。

顧みますれば、私はクラスの平均年齢より、かなりの高齢で記憶力も脆弱となり、また職場の関係で時には休んだりして、クラスの皆様の重荷になっておりましたが、然し鎌田先生は私の様な落ち零れ者にも非常に熱心に

ヒンズー，シンゴサリ遺跡

珍らしそうに集ってきた子供たち

優しく教えて下さいました。この様な情況からお別れして私は、また英語を使うチャンスの多い海外の職場に出向することになりましたので、この機会に鎌田先生はじめクラスの皆様に心からお礼を申し上げる次第です。

(二)、私の略歴

私は大学の土木工学科を卒業後、土木の技術者として河川の調査、計画、設計、施工、監督及び砂防部門など一九六〇年より一貫して、河川、砂防事業に従事。このことは本当に技術者冥利に尽きます。

私の海外での活躍は、一九七三年から七五年まで、インドネシアの西部ジャワ州、ジャカルタにある公共事業省水資源総局で河川計画の専門家として勤務し、其の後、一九八〇年から八三年まで中部ジャワ州、ソロ川流域開発事務所で河川工学の専門家として勤務致しました。

この私の記事が皆様の目にとまる頃は、私は日本より約六〇〇〇kmも離れた赤道圏の国、インドネシアの東部ジャワ州にて流出土砂の防止、洪水防禦の手段を求めて州内各地を巡り歩いてゐることでしょう。

即ち今回、一九九六年から九八年まで東部ジャワ州、ブランタス川流域の水資源開発に関する河川、砂防技術の専門家として働かせて戴くことになりました。

(三)、インドネシアのこと

私は曽(かつ)て勤務した西部ジャワ、中部ジャワに加えて、今回二ヶ年をかけて東部ジャワを東奔西走し、ジャワ島を隈なく歩くことになります。

インドネシアの全面積は、一九一万平方kmで日本の五倍以上あり、ジャワ島は一三万平方kmで、インドネシア全面積の七%程度です。この事などでインドネシアを語るのは、少し痴(おこ)がましい限りですが、インドネシアを、私の第二の故郷の様に思ってゐる私としては、この国のPRをしたいのは人情ですが、この国の事は旅行会社のパンフレットや市や市販の案内書に譲ることにします。

今回、私の赴任先はスラバヤから南下したマラン市で、この地は標高が高く涼しくて温泉もあり、有名なバリ島にも近い好適地です。ヒンズー遺跡の多い所ですから平城N・T文化協会の皆様が観光に來られるのを、お待ちしてゐます。

秘書嬢の結婚式

村娘の米舂き

それでは、インドネシアの風物の一端を、過去のアルバムより披露しまして、皆様の御参考に供し、文化協会に謝意を表します。

新住所

Jl. Simpang Langsep No. 31
MALANG 65146 INDONESIA
Phone & Fax 0341－561483

Hitoshi SHIMADA

『ならの女性生活史』調査を終えて

宮川恵美子

――人生の分岐点から――

平成七年十月に出版されました、ならの女性生活史「花ひらく」の調査員として、多くの女性の生活の在り方を追求し、数多くの女性達に聞き取り調査させていただき、人はそれぞれの生活からにじみ出る姿は様々で美しくも尊いものだと痛感致しました。

女性史グループの同志が三年間活動し、図書館や資料館へ足しげく通いつめ、資料収集した四万五〇〇〇点のカードで年表にまとめましたが、明治初期を担当した私にとりましては、女性の資料の少なさと、見出してもそ

の人の最後まで確認出来なかったもどかしさが残ります。また古文書の読みもくだらないものに顔をつき合せながら少しでも判読出来たときの嬉しさは今も忘れられません。

奈良県は二府二県に囲まれた盆地で大きい災害もなく豊かな土地柄、男性中心の家制度の中に縛られ、女性は家の労働力でしかなかった辛い環境のもとで、強くたくましく生き抜いて来た女性達と膝をまじえながら、ぽつりぽつりと口を開いて語ってくださった高齢の方、昔なつかしい生活用語などなど、また男性の蔭で侮辱と屈辱に堪えねばならなかった女性達の生々しい声を聞き、共に涙を流した感動の日々が懐しく回想されます。

私は家制度チームを受け持ち、一番女性に携わりの深い冠婚葬祭、出産、子育て、衣食住につき聞き取り調査する中に、文化、宗教面にも大いに関係があり、地域により生活習慣も異なり女性の労働力も非常に違うことに気付いた時、どうした柱立にすれば片寄らず掘起しまとめられるかと途方にくれたことも多々ありました。

山間地方の調査で協力いただいた方々の心あたたまるふれあいと、のどかで厳しい自然の心地よさを肌で感じることの出来たのは生涯忘れることは出来ません。

時代は流れに則して、今や奈良県は就学率とピアノ所有数は全国のトップといわれる中、女性の就職率、主婦専業は全国の最下層とは、如何に考えるべきか。反面、恥しい思いもする。

こうして大病後、一年目の自信なき身体でありながら「女性史講座」を受講したのは平成四年四月のことでした。良き仲間達との出会いがあり、皆なに支えられ、三年間の大役を為し遂げることが出来、発刊の喜びは、ひとしおでした。

今まで実践してきたことをベースとして、取り残された問題点を更に追求し、極まりない女性の生き方を全国に、海外にも視野を広め、21世紀に向かって自分たちの生き方にも目を向け、いかに共存していくべきかについて「奈良女性史研究会」OBとして結成致しました。

今春、五年目の坂を乗り越えた私ですが、半信半疑の身体で春になれば芽吹くような、夏になると花が咲くのだと命の大切さを自然の中で嚙みしめ、体力の続く限り仲間の一員として笑顔で向かえる21世紀へと、ささやかな夢を抱いています。

【随　想】

「三」にまつわる四方山談議

森下　勉

人類は古今東西を通じ、色々な名言や格言、人生訓等で「三」という数字にかかわりが多いと思う。

日本人も例外ではない。例えば3条件とか3原則、あるいは3つのお願いとかいう風に、好んでよく使われている様だ。

古いところでは、神武天皇の御代から皇位の標識として継承されている三種の神器に始まり、戦後画期的な電化製品として、国民生活の向上に貢献した「掃除機、洗濯機、テレビ」も家庭電化の三種の神器と言われたものだ。

もう何十年も前の話になるが、子供の好きなものと言えば「巨人、大鵬、玉子焼」で、嫌いなものは「江川、ピーマン、北の湖」と言われ、マスコミの創った三つの言葉としては語呂もよく、まことに本音をついたものであった。

又正月の初夢にこれを見ると「吉」とされている、「一富士、二鷹、三茄子」も然りである。

なぜ「三」がよく使われるのか、私なりの解釈では、「三」は火鉢の三徳（今の若い人は知らないかも）の様に安定感があり、何よりも人々が覚え易い数の限度が三であると思う。これが一番の要因ではなかろうか。

仮にこう言った名言、格言が、五ヶ条も十ヶ条もあって、人々にさあ守りなさい、心にとどめなさいと言ったところで、数が多いため誰もが覚え切れず、あたら名言格言も残念ながら忘れ去られるのがオチである。

スポーツの世界でも、どれだけ「三」の数字にお世話になっていることか。野球のルールで3ストライクで1アウト、3アウトでチェンジするから面白い。

これを1アウトでチェンジしたり、逆に4アウトや5アウトでチェンジしたりすればどうだろう。試合時間が

たちまち短くなったり、逆に間伸びして極端に長くなり、観客の不平不満からファンは激減し、商売としているプロ野球などはその経営は成り立たないであろう。

私の現役時代の勤務先の社是も交通安全の誓いも、三項目であったし、私自身も職場のミーティングや私ごとで「三」をアレンジして、よく使わせてもらった。

こんな事があった。後輩の（新郎）の結婚式に参列し、来賓代表として歯の浮く様な祝詞を述べ、本人を褒めたたえた最後に、老婆心ながらと一言断って、『君は家庭でも社会でも、責任のある立場になったのだから、これからは「三つの袋」をより一層大切にして欲しい』旨、挨拶をしたものだ。

その三つの袋とは、

① お袋（両親、先祖を意味する）
② 知恵袋（能力のこと）
③ 胃袋（健康のこと）

のことで、その当時、親族から喜ばれることが多かったが、色々な結婚式に出席しバカの一つ覚えのように、この三つの袋を乱発した中で、ある式場で新郎の母より「うちの息子はもう既に三つの袋を大切にしてくれているので、有難いことですわ」。と嫌味を言われた事もあった。老婆心とは言え、「三つの袋」も時と場所と相手を、選んで喋らなくちゃーと、反省しきりであった。

健康面でも「三」つの名言、格言は数多い。一々紹介するには枚挙にいとまがないが、よく聞く「快食、快眠、快便」。「栄養、運動、休養」もそうである。

先日テレビで某タレントが、老化防止の三条件として、

① 歩き続ける。
② つくり（造る。創る。作る。）続ける。
③ 異性を意識し続ける。

ことをあげていたが、要は「続ける」ことが大切である。又③は変に女性（又は男性）に色眼を使えと云うのではなく、相手を意識することにより、服装、みだしなみもキチンとする様になり、何よりも気分的に若やぐというもので、これなら誰にも出来そうである。

平成元年に私は病院で内臓の手術をした。手術の直前の落着かない緊張した空虚な一瞬に、ワラをもつかむ思いで、思わずほとばしった3つの単語、それは

「神様、佛様、部長先生（執刀医）」

過去から現在をとおし、「三」の数字には色々厄介に

なって来た一人であるが、今後も人生の節々で、昔から言い伝えられている三つの教訓、格言を信じ、又頼りにしたりして生きて行くことが多いので、引続きこのことに親しみと楽しみを持ち乍ら、更に更に話題を拡げたいと思っている。

想うこと

平山　通

一、帰り道

私は、時に通勤のペースを変えてみることがある。それは仕事が一件落着してほっとした時に……。

春頃になって、ようやく日脚が長くなりかけた頃、日没を考えて、仕事を早めに切り上げて近鉄に乗る。電車はひょうたん山から線路がカーブしていて、草香山辺りからの眺めは、言葉では言えない素晴らしさである。おしてる難波の西の海の入日の日想観を拝める時は、私には年に一、二度位か、味わう事の出来ない《しばしのうさを忘れ、今日あるを感じる時》である。

そんな時は、電車を降りるのも一駅手前の「平城」である。いつもは見乍ら通る駅ですが、他の駅と違ってローカルな感じがする。踏切を渡ってだらだら坂の道で、珍しく赤い鳥居の前で拝礼して登ると、息長足日女命（神功皇后）の陵に出る。白い鳥が二、三羽いつも遊んでいる。がま蛙の合唱の中、次第に「今日も一日終わりましたよ」と日が沈んでいく。行く手の林間にはチラホラ住宅の灯が点灯されて、夕餉の支度に余念のない奥様の姿が目の前に浮かんでくる。

この静寂の中に御陵の池のほとりで、しばし佇み、目を閉じると、一瞬時代が遡り、そこには、二人の皇子が労わり励まし合っている。

秋さらば　今も見る如　妻戀に　鹿鳴かむ山ぞ
高野原の上

の雰囲気がひしひしと身に迫ってくる思いである。

ゆっくりと上りつめて集落にはいる頃には、春の宵が足元に迫っている。値千金。花に清香、月に陰素晴らしい春の宵である。下り坂になるとつい口ずさんでみる。

宵闇迫れば　悩みは　果てなし　乱るる心に　…
……。

それは『君戀し』のメロデーである。津風呂の集落を過ぎる頃、道は広くなり外環の音が耳に飛び込んでくる。

春宵の一刻をこんな気分転換をしながら、時には訪れてくれた友人を、わざわざ「平城」まで送る事もあり、「帰り道」を顧みるのも、また楽しいものであり、オヤッと驚くような発見もある。

二、散歩道

大宮辺りで、用事を終えた後、気分が乗れば北へ向かって大宮橋を渡った所から、佐保川に添って遊歩道を東に登ってみる事がある。

この辺りは、昔はかなり大きな川だったらしいが、今はその面影もなく、名のみを残して、保存会の方々の清掃も行き届いて、かろうじて千三百年の悠久の流れを続けている。

左岸の佐保小学校を過ぎた所から、万葉の歌碑に逢う。

千鳥鳴く　佐保の川瀬の　さざれ浪　止む時もなし　わが戀ふらくは

大伴坂上郎女
（巻四・五二六）

この辺りは古代有数の名門の大伴家の居住地であり、

「佐宝楼」があり、春日、率川、坂上の里（今の三條通り）の開化陵辺りに住居する郎女らが往きしていた。

うちのぼる　佐保の川原の　青柳は　今は春べとなりにけるかも

大伴坂上郎女
（巻八・一四三二）

私には戦時中、英霊の帰還の歌謡の一つとなっていた、大伴家持の長歌の中の『海行かば水浸く屍、山行かば……』（巻・十八）が想い出され、「やすらぎの道」の佐保橋を過ぎた辺りから、川は北へ折れて聖武陵・光明陵の辺りで吉城川と合流する。土塀造りの民家を縫って行くと、「今在家」の停留所に出る。般若寺、奈良坂はもうすぐ、ここまで大宮からゆっくり歩いて一時間程（近鉄奈良駅までは十五分）。川は此所から先は民家から離れて、ぐっと展開した三笠山の北麓の春の野辺の中を（柳生街道（R369））添って行く途中、バス停の帰りの時間を見ながらストップする。川は、道と離れて奥山めぐりの東側に添って、「鶯の瀧」へとつづく。

後の佐保川の源を見極めようと若草山山頂から鶯の瀧まで約2km、途中新緑の中、朱塗りの橋を渡った所（近くに興福寺の奥の院がある、花山辺りから十分程下りる）瀧からの流れは「中の川」（柳生街道）まで直線距離は、そう遠くはないが、枡道である為、避けた程が良いと教えられ、いづれの機会と思っている。

先日、家持が詠んだ万葉集の長歌の一節を（英訳）、クリントン大統領が宮中の晩さん会で引用したとあった。スピーチは家持が聖武天皇の難波の宮の壮大さを詠み、長い伝統の歴史に敬意を表す内容であった。その歌（長歌）は、

……　そきだくも　おぎろなきかも。
こきばくも　ゆたけきかも。　ここ見れば
うべし神代ゆ　始めけらしも。

（巻二十・四三六〇）

【俳句】

松籟

牧野春駒

蛇穴を出て落慶を目のあたり
引導を授けて朝寐和尚かな
蚕棚より走り出でしは鼠の子
松籟の泉の底に起りけり
夜学子の一人が消して去る灯
如意輪寺うすうすとある無月かな
威銃砧して大摩崖佛
捨案山子シャツのボタンを嵌めしまま
谷紅葉濃さが深さであり
眠りより覚めし狐に尾のありぬ

貴船祭

伊藤柳紅

屋根替の萱に突き刺す大鋏
神輿来る中を下校の貴船の子
青空へ近づいてゆく鉾頭
早々と御廟の萩の刈られあり
落ちて来し木の實のはじく木の實かな

春の雪

上原髙美

襟足に冷たく落ちる春の雪
櫻花の声歯の美しき乙女去りて
窓越にそっとのぞいた寒牡丹
花の宴酒をふるまふ人気者
老いたれど外出爽やか万歩計

余り苗

大浦小枝子

挨拶のごとくに花粉症きたる
眩しさを失ひはじめ辛夷散る
首塚の辺に集まりし余り苗
膝に土つけてもたらす蕗の薹
冬帝はそろりそろりと出でましし

星月夜

岡良子

裏口はヴェニスの運河星月夜
尺蠖を指に移せば尺取らず
凍鶴のはがねの脚に水踏まへ
予後の良き夫と据ゑ合ふ二日灸
不意にくる永久の別れや風花に

白障子

柏木一枝

大いなる初日に染る白障子
柚子風呂に感謝の齢をしづめけり
救急車はたと止りて朧月
古雛の吾歳月と共にあり
短日の心に添はぬわが起居

毛虫

川口シズヱ

強風に彼方此方（あちこち）散りし柿落葉
蜩の声のかむさる煮炊もの
深吉野の星空眺む盆帰り
風もなく紅葉日和となりにけり
朝風に首振りつづく毛虫かな

茄子の紺

喜多まさ

粕汁にあたたまりゐて無言かな
四代に生きて平成老の春
立つときは両手をついて夜なべかな
木に一人梯子に一人松手入
すみやかに水をはじきて茄子の紺

あかときの

木村長子

あかときの水引草は白ばかり
叱られてゐる子へそっとさくらんぼ
痛むとは生きる証や梅雨に入る
食卓は私の机梅ふふむ
春愁や紙人形になき目鼻

背負籠

込山山歩

夏料理吉野にあれば杉の箸
黄落や髑髏持つ観世音
磨崖仏肩にかかりし藤の花
蹼の目覚めてをりぬ浮寝鳥
歯朶を刈る背負籠だけの重さかな

初音

坂本よしゑ

晴れ渡る禽啼山に初音聞く
庚申の猿も揺れをり風花に
脊の高き孫がうしろに初鏡
貝殻で作りし雛を飾りけり
桐咲いて石垣高く大和棟

梅見婆

辻田しま代

転居先門に貼られて花八ッ手
送り主知らずポストに蟬の殻
月光の縁に絵本の散らばれる
この嫗話半分菊なます
鍵一つ持ちて身軽や梅見婆

茶摘

中川君子

ひらひらとかわらけ消えし谷紅葉
茶摘女の歌出しあとは寡黙なる
よろけては走る鹿の子に立ち止り
松風の音突き刺さる冬浜に
目礼の探梅道を譲りけり

五山の火

南村照栄

ぬいぐるみ背負ふ子のあと袋角
雨粒に色つくことも藤の花
たたかひのことは黙して五山の火
渋柿の力いっぱい成りにけり
青空の下凍蝶の凍てつづく

葉桜

西岡智子

はらからの諍ひしまま花は葉に
中国の山中にして裸の子
立石寺粧ふ山のふところに
おしゃべりの止む時蟹を食べるとき
飛び跳ねて潮吹く鯨春の海

早紅葉

西田たまみ

乳母車降りて押す子や土筆生ふ
犬に汲む水にいとどの溺れけり
早紅葉の色より塗りて画架の人
犬の餌を窺ってをり寒雀
風の襞岸に片寄せ池凍る

盆の月

西山佐代子

敗荷の身の丈あまる寺領かな
島影はゆっくり離れ初時雨
外つ国へ発つ娘見送り盆の月
語り部のお国訛りや原爆忌
噛の傷ののこれる批把をもぐ

大菊

平井咲子

夕刊のぬくみ手にあり今日の月
穂芒の風のゆくへの道白し
大菊を育て昔の軍人よ
アイロンの滑り愉しや余花の雨
母と娘の昼寝の顔の瓜二つ

ミモザ舞ふ

福井としみ

このあたり總べて史蹟と土筆摘む
落雲雀弾めば眩し持統陵
蕗の芽に象の小川の瀬の速み
宮滝に次元戻せばミモザ舞ふ
蕗の薹刻めば野辺の香に噎ぶ

雪の白

藤澤陽子

めまとひや廃校にまだ時間割
井の蓋は青竹で編む雨蛙
一頁もどりて読みぬ秋灯下
紅さして無口となりぬ春隣
雪の白切れしところが湖なりき

麦の秋

堀池敏子

春惜しむ青き器に向き合ひて
廃坑の煙突高く麦の秋
燕や腰にきらつく切符切り
ギヤマンの土産取り出す夜の秋
観音の紅葉明りの千手かな

花粉症

牧野和代

朝寝して五体連がりゐたるなり
花粉症夜行フェリーに寝ころべり
管抜を走り抜けしは巫女であり
欄(おばしま)を滑つてたのし地蔵盆
銀杏拾ふ木造校舎の親しさに

十三夜

三井サチ子

胡蝶蘭胸に飾りて卒業す
線路工夫拭ひし汗を絞りをり
移り住みて少し落付く十三夜
宿題を提げて来る孫菊日和
小便小僧マント着せられ春を待つ

花梨の黄

村上俊子

初富士の白き淑気のただならず
法師蟬命惜しみてひたに鳴く
蓮の花咲いて僧堂応へなき
高き枝に残る花梨の黄に染みぬ
豆撒きて明日外遊の支度かな

柏餅

森田陽子

殉国碑ぬらす大社の氷雨かな
長恨歌軸かけ替えて春隣
新妻の頬かすめたる夏燕
媒酌の責め果たしきて柏餅
踊の輪抜けて土産を求めたり

一期一会

和田　美代子

梅が香や小流れに石透きとほる

囀りに竹幹彩を違へをり

聖五月四方の山脈濃く淡く

朝の彩夕方の彩酔芙蓉

茶事すすむ一期一会や蔦紅葉

古川柳

そのあした橋の欄干きずだらけ

楠は鼻をつまんで下知をとり

五右衛門は生煮えの時一首詠み

芭蕉は飛び込み道風は飛び上がり

明くる日は夜討ちと知らず煤をとり

実のならぬ花で実のある返事なり

釣れますかなどと文王そばへ寄り

おつかさんまた越すのかと孟子言ひ

七人は藪蚊を追ふにかかつてゐ

註を読む時に蛍はゆぶられ

グループからの便り

歴史教養講座

東　叡

考古学との出会い

歴史教養講座を聴講して三年目になる。『日本書紀』の講義も途中からであるが、楽しみ乍ら聞いている。特に発掘した遺跡や出土品に関する話しは興味深く、逸話は楽しいものである。

文化協会に加入したのは、会費を払えばどの講座、同好会にも出席できるとの事で、永続きするものを対照し検討していると、歴史教養講座が目についた。

今更、教養講座とは、……と考えたが、講師が網干関大教授と知り（失礼なことだが）考古学専門であると、以前より伺っていた。それは文学的より実証的であるので、判り易いし又憶測が少ないと思ったからである。

昭和二十四年頃だと思うが、日本の歴史書は史実に基いていないとか、生きている日本史とか、種々の本が出

版されているのを読んだが、なにが真実であるか疑問に思ったことがあった。仕事に追われていたときは、何のメリットがあって、過去を知らなければいけないのかと、疑問を持っていたときもあったが、推理物が好きで、新聞紙上に掲載された、巨大文化の謎、古代史ミステリー傑作選（河出文庫）は面白く読ませてもらった。少しは歴史に興味を持っていたからかもしれない。

昭和十七年頃に奈良市元興寺町（現ならまちの家）に住んでいた。戦争が激しくなって来たので、父が防空壕を掘っているのを手伝ったときの事である。掘るとこわれた瓦がぞくぞくと出て来た。大半は破損していたが、その中で二種類の唐草紋様の瓦で、紋様のはっきりとした良いものを記念になるからと保存しておいた。一年後同じ町内の別の空地に町内会の方が、大防空壕を掘っているのをみた。その時は銀色の瓦が多量に出土した。掘っている人達は大変な苦労であったと思うが、何故色が異なるのか、又どこを掘っても瓦が出るのかと父に聞いた。昔、元興寺という大きな寺があって、お堂や僧房等の建物が沢山あったが、火事で焼けたり、壊されてその跡に今の町並が出来たと話してくれた。小学生の頃の話しである。

戦争が激しくなるにつれ、食糧難となったので、京都府の田舎に引越しをした。田舎は奈良と異なり、井戸水や落松葉（ゴモクといった）柴（シバ、木の小枝を束ねたもの）割木（マキ、丸木を割ったもの）を燃料としていたので、毎年秋から冬にかけて、父と共に燃料を取りに山へ入った。昭和二十三年頃と思うが、山の尾根の小高い所に穴が掘ってあった。こんな所に、誰が、何の為にと疑問に思っていた。一年後山に行くと、白い花崗岩が掘り出され、露出しており、一部が倒されて穴が見えていた。子供心に怖かった。しかし何故岩が山の上に組立てられていたのだろうと不思議に思った。父に聞くと、発掘を専門にしている人で、学問上各地で掘り、研究している、ここでは剣とその他一部のものが出たが鏡はなかったと聞いている。と話してくれた。

今想えば古墳発掘の始めての出合であった。現代のように新聞や、テレビ、書籍で古墳の情報や、発掘の意味が判っていれば又、別の見方があったのではないかと思っている。

学園前に大和文華館が出来た頃、考古学の教授（名前

は失念した）がよく来られていると聞いたので、元興寺の瓦を持って行き鑑定をお願いした。瓦は奈良市内を掘れば、幾らでも出て来るので、瓦そのものに値打ちはない、元興寺創建時代のものに間違いはないが、出土した場所に何があったかが重要で、その辺は僧房があったのではないか、周辺を掘らないと判らないが、私は建物の専門ではない、必要であれば調べてみなさい。といわれた。父が大切にしていた瓦なので残念であった。一度調べてみたいと考えている。

このような出合いを想い起こしている現在であるが、実証に基く研究と化学分析や、年代測定等の進歩により、古代史の学説が変わりつつあり、又、新しい発見による話を聞く事を楽しみにしている。

古代史講座

光岡　靖子

鬼頭先生の古代史講座が始まってから、もう十数年になります。はじめの頃はご専門の木簡、特に長屋王邸跡から大量の木簡が出土したときには、とても楽しいお話をたくさんしてくださって、私どもも興奮いたしました。時々報道される発掘のニュースについて、歴史の背景を講義してくださったり、古代の寺院や平城京の街づくり、人々の生活などについても教えていただきました。

一九八七年から、「日本霊異記」の通読をはじめ、講談社学術文庫の三冊を四年かけて読み終えました。

一九九一年秋から「読日本紀」にはいっています。テキストは東洋文庫の「読日本紀　直木孝次郎　他訳註」なのですが、最初にいただいたコピーの資料が拡大コピーの大きな字になっていて、それだけでとっつきやすい気持になりました。もちろん、そんなに易しくはありませんでしたけれど。講義は先生が数節ずつ音読、解説され「御質問は？」が繰り返されます。本を読むとき音を意識するのは、和歌がでてきたときくらいで、意味がとれれば先へ読みすすむのが普通でした。層富の汁10号に先生は音読がご自分の勉強にもなったと書いておられますが、聞いている者にとっても得たものは多く、読み方では、例えば干支の「癸未」はキミではなくキビだったなど正確な読みを覚えました。解説が興味深いのはいうまでもないことですが、皆さんが楽しみにしているの

は質問の時間です。ちょいちょい使われる「たぶれごころの会」の所以はここにあるのですが、その日の資料に関すること以外でも、それこそ日頃疑問に思っていることなど、さまざまな質問がでます。奇抜な質問に先生が絶句されたり、おもいがけない方向にひろがっていったりするのですが、寛容な先生はいつも誠実に答えてくださり、皆が考える楽しさを味わう時です。

ずっとお元気だった先生が昨年、突然入院なさいました。一同心配いたしましたが、快方にむかわれたと聞いて安心し、とりあえず講義が再開されるまで、自分たちで続けようということになりました。読んで疑問をだしあい、話し合うだけですが、古代史に詳しいかたが何人かおられるので、それなりの成果があったと思います。うれしいことに三月の例会にすこしスリムになられ、先生がいらしてくださいました。みんな元気がでたのか、いつもより活発な会でした。

見学会をふくめて今年も楽しい会がつづきます。興味をおもちのかたは、初回から行き届いたお世話をしてくださっている西島芳子様に声をかけてみてください。ご参加をお待ちしています。

「囲碁同好会」

中村　正雄

囲碁と将棋

最近、羽生善治が将棋の七冠を独占して話題を呼んでいる。NHK杯にも優勝し花をそえた。弱冠二十五才である。

タイトルは独占されてはいるが、羽生に続けと若手棋士が頑張っている。森下、村山、森内、行方等活躍が目覚しい。

囲碁界ではタイトルの独占はないが、小林覚碁聖、王王座、柳天元、又結城早碁選手権者の華麗な碁はファンを魅了してやまない。

これら若手の台頭には目をみはるものがある。

こうして共通した若手の飛躍、強さはどこから来ているのだろうか。

まず第一に考えられることは、既成概念にとらわれることのない新なる発想であり柔軟性なのではないだろうか。今迄あまり打たれなかった手でも平気で打つ、あるいは相手の考えていない又は盲点となるような手を発見

して打つ、囲碁も将棋も奥が深い、無数の定石、無数の対局がなされていてもいまだ完成されているわけではない。知らざれがたい部分が、判明されている以上に残されているのではないだろうか。

そのような部分を追求し、自由な発想、柔軟な対応で勝負に臨んでいるのではないでしょうか。

また、いわゆる大御所と呼ばれる先輩達との対局についても良い意味で気後れすることなく、勝負は対等と互角に立ち向う現代感覚、勝負に対する真摯な態度このような事柄が総合され勝率を上げているように思われます。

今年、ＮＨＫが行った「全国少年少女将棋大会」には羽生人気もあって昨年の二倍の参加者が集まったとのことであった。

囲碁にしろ、将棋にしろ日本古来の伝統ある競技が若い力によって継承されて行く事は大変喜ばしいことです。

老若男女をとわずだれでもが行える競技であり、今後ますますの発展と隆盛を願うものである。

◎同好会の活動状況について

毎年、春、秋と二回行われている「奈良市公民館対抗囲碁大会」も今年で二十六回を重ね、そのうち当同好会は十六回優勝しております。

本年四月二十一日（日）におこなわれた大会では惜しくも優勝を逸しました。

通常、平城西公民館における会の活動は、毎週日曜日の午後一時から五時までの間、仲間同士の対局、春秋行われる大会、一般対局中のリーグ戦による昇段、昇級の認定、プロ棋士中嶋先生による、隔月毎の指導碁等も実施しております。

皆様方のご参加を心よりお待ち申しております。

木目込み人形・押絵同好会　鷲塚　順子

私が、この木目込人形押絵サークルに入らせてもらって、二年経ちました。丁度、二年前、仕事も辞め、新しい所へ引越して、これからここで知らない人達ばかりの中で、どんなライフスタイルを作っていけばいいのかな―？と不安に思っていた時、このサークルに入ってい

た友人に製作中の作品を見せられ、すすめられました。それでも、「私はそんな器用な人形作りなんて、とても出来ないわ」と心に思い何日か経ちました。そうしたら、「今度、レクリエーションで松伯美術館に行って、皆で会食するのよ」との声、外へ出たがりの私は、厚かましくも参加、そして、もうそのサークルの雰囲気にすっかり馴んでしまって、初めて顔を合わす人達なのに、古い古いつき合いのあった様にとけ込んでしまう始末。先生といい、仲間といいとても良い人達ばかり。新しい集団に入る時、多少の人見知りをしてしまう私なのに……自分で吃驚しています。

作品は、昨年「無我」と押絵三枚、今、「あっちゃん」と言う可愛らしい兜人形を製作中、先生のおだて上手にルンルン気分で月二回、その日を楽しみに通っています。

手を動かしながら、互いに我家の出来事をおしゃべりしたり、気軽に自分の悩みを吐き出したり、人各々の体験談を披露したりして、人生のアドバイスをいっぱいもらって、心元気に帰ります。

どうぞ、この楽しいサークルに仲間入りして下さい。ただし、〝笑いじわ〟の気になる方は無理かも?

読書会

林 美智子

九五年七月

一三二回目とずい分続いている読書会に、私は今回から参加している。読書会がこんなに続いている理由や、読書会の活動のようすなど、私なりに感じたことを書いてみたいと思う。

七月は五木寛之著「蓮如」が課題図書であった。ちょうど蓮如没五百年で、レンニョブームの最中であるが、ずっと蓮如の研究を続けていた作者が、暖かい目で蓮如の人柄・思想を書いた作品であった。この回の読書会では、いろいろな角度から感想を述べ合い、時間オーバーも気にせず話が盛り上がった。といっても結論めいたことがないのがうれしい。各人それぞれ同じ本を読んでも、感じ方が違って当然だが、読みの深さ、的確な批評は、私自身とても参考になり、一ケ月後の読書会が楽しみだった。

八月の課題図書「親鸞」は、自由に選んだ著者の作品

を読んでくることであった。私は手元にあった吉川英治の「親鸞上・中・下」を読んだ。小説としての面白さに加え、人間親鸞の苦悩や、その時代に生きる人々の様子がよく解かった。作者自身は、この作品をもう一度書き直したいともらしていたが、読書会でも、少しもの足りないという感想もあった。そこで笠原一男・石田瑞磨・武内義範・赤松俊秀たちの親鸞を読み比べ、真(まこと)の親鸞の姿を知りたいと、意欲的に読書されている方々も多く、ただただ感心してしまった。

九月、前田愛著「近代文学の女たち」
十月、久保田万太郎著「春泥・花冷え」
十一月、ゴルドーニ作「抜け目のない未亡人」

十二月、宮尾登美子著「蔵」上・下巻を二ケ月かけて読み、話し合う予定が、全員十二月中に読み終えて、まとめての話し合いになった。

この作品は、雪国新潟の旧家であり、蔵元である田乃内家の一人娘を中心に、物語が展開する。家の繁栄のみを頭に描く男性、それによって宿命的に生きる女性、東北なまりの会話がやわらかく、表情が目に浮かぶような書き振りだ。読みながら反発したい場面は何度もあったが、一気に読んでしまえる作品だった。

この回の話し合いは、女性の生き方にかかわる身近な問題として、多くの意見がでた。どんな作品も、その時代を抜きにしては考えられないが、昭和初期はまだまだ封建的な世の中で、男性のように活躍したい、自分なりに生きたいと願った女性は、よほど強い意志がなくては、そのような場が、世間からは与えられなかったことだろう。作品の巻末・作者付記により、登場人物のその後の生活を知り、一同ほっとした場面もあった。又主人公が盲目でなかったら、この伴侶を選んだだろうかなど、勝手な想像をめぐらし、話し合うのも読書会の楽しみである。

九六年一月、後藤明生「吉野大夫」

題名から、どんなきらびやかな大夫の日常が描かれているのかと楽しみにしたのは私だけではなかったようだ。読んでも、読んでも、その人の人となりも、容姿も浮かんでこない作品だった。享保三年（一七一八年）という

から、二七〇年前に存在したかも知れない一女性に視点を当てて、現代の作家が、何かよりどころを探している行状記のようなものだ。この墓が大夫のではなかろうかという程度のことで、少し期待はずれであった。吉野大夫—覚え書き—とでも題名にしたら納得がいくのにという意見もでた読書会であった。まずは本選びのミスであったように思う。

いつも、作品を完全に読んで行ける時ばかりでなく、中途半端な読みで、読書会に参加する日もあるが、他の方々の意見を聞くだけでも、少しずつ自分自身が成長するような気がする。また月に何冊かの読書であっても、いろんな分野の読書の機会を与えられることは、大変ありがたいことだ。もっと多くの人が参加され、自分の考えを述べられるといいのにとつくづく思う。

最後に三月「伊勢物語」を書いておきたい。

代表的なくだりの、第九段を、松岡先生の講義で学習した。伊勢物語の概略、歴史的位置、他の文学に与えた影響、そして本文の解説と、わかりやすく、奥深く、教えていただいた。古典は読みたくても、一々解説と照らし合わせながらというのが困る。今回はよき指導者を得て楽しく理解させていただいた。

詩吟の会

春田　良子

寒梅　　新島襄　作

庭上の一寒梅　笑って侵して風雪を開く
争はず又力めず　自ら百花の魁を占む

今年も又庭先の一輪の早咲きの梅が平気で風や雪にもめげずに咲いてゐます。まるで微笑むかのようです。

一番咲きを競おうとしたのでもなく、無理に努力したのでもない、自然にあらゆる花のさきがけとなってしまったのです。新島先生は風雪に耐え刻苦試練をのり越えて百花にさきかけて咲く素朴な姿に習い、立派な人に成るよう努力してほしいと……。

樹木は一年また一年と、確実に自らの年輪を刻みつつ生きて行く。私等の人生も四季折り折りに、懸命に生きた足跡と年輪として重ねているといへよう。そして当然

のこと人にも成長する時がある。

新しい年もあけて一月十一日、若田さんは宇宙の旅へ日本初のMS実験衛星を回収する任務に……。

「頑張って下さい。成功を祈ってゐます」とお祈りしてゐる間に、早や二十日にはもう若田さんは大役を果たして、無事帰還され本当に御苦労様でした。

若田さんも六才ごろにテレビを見て、テスト用紙の裏に描いたロケットの絵の横に〝マイネームイズコウイチワカタ〟と署名するほどに夢はふくらんでいたそうです。何でも興味をもつと熱中する子でしたと母さん。幼少の頃からの夢をついに実らせ宇宙へ。

目標をもつ事、よい先生に出合ふ事、励ましを受けること、意欲をもつ事、ほめ言葉にハッスルする人は本当に幸福だと思います。

吉本提瑞先生にお会いして私もあっと言ふ間に早や十年です。十年一昔と云ふけれど、楽しい事、悲しい事いろいろありましたが、よい先生にお会いして詩吟の御指導を受けて何もかも忘れて、一日皆様とたのしくお話し出来先生の人生豊かな有意義なお話しをして戴いてゐます。

一週間が待ちどうしくあっと言ふ間です。

これからも健康に注意して、私は体のゆるすかぎり頑張って行きたいと思います。

健康の為にはストレスをためない事が第一、おいしい食事腹八分目に睡眠（スイミン）は十分にとり、毎日を朗らかにたくましく又大きな声をお腹から出して、一生懸命に生き抜くことが大切だと思います。

私もう年やからと言ふ言葉をよく聞きますが、今からでもよい、生涯学習を考へ直して六十の手習と言われようが、何事にも挑戦する事、これが健康と長寿につながる秘訣でもあると思います。

私達はもうくよくよしている暇がないのです。お若い方は別ですけれど……。

一に楽しく、二に楽しく、三に楽しく、何でも一生懸命楽しい事を探して生きていきませう。

宝の一生を一日一日を大切に生ききって健康で完走したいと思います。

明るい家庭を守るためにも、健康で頑張りませう。

皆さんもどうぞ詩吟の会へ是非お出掛け下さいませ。

たのしい一日をアッと云ふ間の二時間です。

若返りますよ。

年を取らないために、勇気を出してお出掛け下さい。

お待ち申上げております。

地酒を味わう会

中村　正雄

酒蔵見学

日本各地から寒波到来のたよりと共に、例年にない大雪が荒れくるっている。

こんな時期こそ杜氏の出番であり、酒造りの最中なのでもある。

これまで何度となく酒蔵見学を行って来たが今回は「京都伏見の玉乃酒造」を見学することとなった。

二月上旬の午後、伏見に着くと横なぐりの吹雪であった。蔵元まで降りしきる雪の中を急ぐ、五・六分で到着した。

工場見学を前に、まず一同会議室に立ち寄り酒造りの資料等の配付を受け、概要についての説明を聞く。

京都伏見の「玉乃酒造」前にて

何事によらず物造りの原点は、素材である。

この蔵では酒米には岡山県産の銘柄である、備前雄町（オマチ）を使用している。

この酒米を長期安定使用するために蔵元は農家との協力体制を築き、大変な努力を続けている。

酒米の特徴は、粒が大きいこと、心白が多いこと、それに穂が長く倒れやすいので育成が難しいことである。

酒造は原料である雄町を精米することから始まるが、純米酒では三〇％以上精米（歩止り七〇％）、吟醸酒は四〇％以上精米し、大吟醸酒においては五〇％以上精米することによって、それぞれの等級別の酒が造られる。

これを蒸米にし、麹・酒母・水を加えて、じっくりと発酵熟成させ、しぼりあげ清酒となる。

今度は、直接工場に案内されそれぞれ造られて行く工程の説明を聞く、大手酒造とは異なり小規模ではあるが代々受けつがれている蔵で手造りの旨い酒が造られているのである。

見学のあとは、楽しみにしていた新酒の試飲会であり、出された酒は、備前雄町一〇〇％使用の純米大吟醸と吟醸超特選であった。

京都伏見の「黄桜カッパカントリー」前にて

これらの酒を飲みながら酒造りについて質疑応答に楽しい一時を過した。

帰りには各人とも大吟醸酒を土産にもらい、玄関前にて記念撮影をし蔵元をあとにした。

次は「地酒の会」の二月例会を行うため、蔵元からもほど近くにある

「黄桜カッパ・カントリー」

という地ビールを飲ませてくれる若い人達に人気のある店で、チャンコ鍋と焼肉を肴に、地ビールと地酒を飲みながら京都伏見の夜を会員共々楽しく過ごした。

拓本を楽しむ会

北本　敏子

初めて拓本展を見た時、墨濃く採られ白字が鮮やかに浮き出した作品を見て、昭和二十一年頃竹原の山陽別邸で見た天井を思い出した。

それは、和室の天井一面が黒く大ぶりな白い漢字が列をなしていた。美しい！と思った記憶はあるが、敗戦の色濃い当時の情勢では、自分とは縁遠いものといつか忘

れていた。今思うと、それは天井板に刻まれたもので、拓本の対象となるものだったようである。

その後も習字帖で見かける程度だった拓本、それがこのニュータウンでは身近にある。高の原駅で採拓されている人に関心を持ち、誘われもして、平成三年秋入会させていただいた。

さっそく、当時の渡辺会長宅に伺い、東大寺瓦のレプリカで、紙の水張り、叩き、拓墨やタンポの扱い方の手ほどきを受けた。続いて、文祥堂や高の原駅の碑で採拓。説明を加えながら手本を示される、その続きを採らせていただいた。墨打ちに気後れすると「大丈夫。後でなおせるから。」と励まされた。タンポの跡がつくと、その墨色に合わせるように全体を打たれた。そんな方法で裏打ちもでき、思いがけぬ作品が自分の物となった。その喜びは大きかった。

間もなく文化祭。見せてもらうつもりでいたら、出品するよう言われ、十月四日皆さんについて吹田市千里南公園へ。弁当を作り、子供のリュックを背負い出かけた。その時の碑文は、万葉集巻十二の、石走る／垂水(タルミ)の水の／はしけやし／きみに恋ふらく／わが心から。であった。

採拓風景

いざ　千曲川万葉公園採拓旅行へ　於京都駅

今見ると、最初からまあ大胆なと思うが、これは内容を選んだというより、碑石が小さい割に文字が大きく、刻が深かったからである。教えていただいた通りにやってみるが、ぬれた紙は扱いにくい。手こずっていると、誰かれとなく手伝ってくださった。無事文字が浮かび上り、持ち帰って裏打ちをし、額をお借りして出品したようなことだった。

この時、採拓の技法もいろいろあることを知った。紙の水張りにしても、水をたくさん使う人もある。墨の打ち方も、全面を濃く又は薄く、文字の部分だけ打つ人もあった。

今では、風が無ければ小さい碑の紙張りから軸装まで、何とか自分で出来るようになった。それでも、一度ついたタンポの跡には苦労している。「後からなおせるから。」は私にとって呪文のようである。あの時の安心感と完成の喜び、それに皆に手伝ってもらって出品できた喜びがなかったら、きっと観賞者のままだったと思うから。今は、現会長の込山さんが新人指導をされている。

一泊二日の採拓旅行も楽しみの一つである。本年度は信州千曲川萬葉公園。

ある人が「拓材は音楽の世界で言う楽譜である。」と言われた。それなら、長い車中でのおしゃべりは、まるで序奏のようである。桜花のみごとさに歓声をあげたかと思うと、沿線にある史蹟の話、美しく重なり合う雪山の話、資料を見ながら採拓の話、それぞれに経験者があり話は深い。なごやかなうちに、最初に採りたい碑も決ってくる。近づくにつれて、誰からともなく宿へ直行させる荷物を仕分ける。車窓にリンゴの白い花を見て、千曲川にかかる長い橋を渡ると目的地である。

一ケ所に二十数基。名の知れた人の作品や書で、碑の大きさにも変化があり、恵まれた採択地である。

紙張りをしていると、早くも石を叩く刷毛の音、リズミカルなタンポの音まで聞こえてくる。気のせく一瞬である。平常心平常心。同じ楽譜をどう表現するか、次第に無心になれる。突然悲鳴があがる。陽に向いた碑は乾くのが早く墨打ちの途中で紙が浮くとお手あげである。陽を惜しんで採り、翌朝は朝食前にも採った。

最後に「千曲川」という詩碑を採った。文字が小さく刻みも浅いので無理かなと思いながら。帰って仕上げると、目を覆いたくなった。紙の喰い込みがたりず、墨も薄かった。もっと薄い紙をこなせるようになりたい。タンポも豆粒くらいな物まであるようで、用具、力量共に不足、いい演奏はできなかった。

広田さんはカメラマンの役もしてくださり、帰ってからビデオテープを回覧して再び楽しんだ。

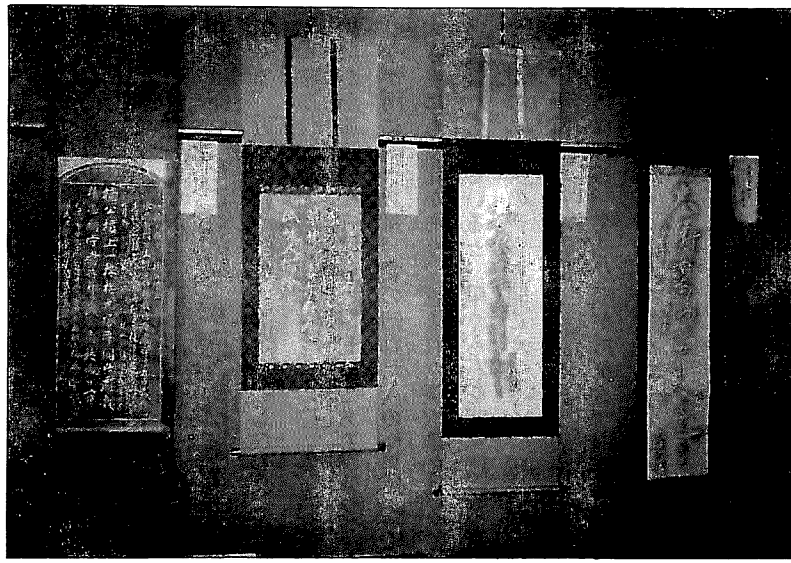
作品展。本年度は、男性会員の方々が鎖を加工され、たくさんの額が展示できるようになった。採択実演も行った。新聞社の人が来られ、会長の実演を見て作品を仕上げる手順をメモされる一幕もあった。

拓本グループの一行も見え、実演に参加された。指導されている方から「ここは、皆さん現場で採っておられるから自然で――。」「軸装、パネルが会員の手になると言うのもすばらしい。」と、おほめのことばをいただいた。そのグループも最近では現地で採拓され、自分達で仕上げられるという。

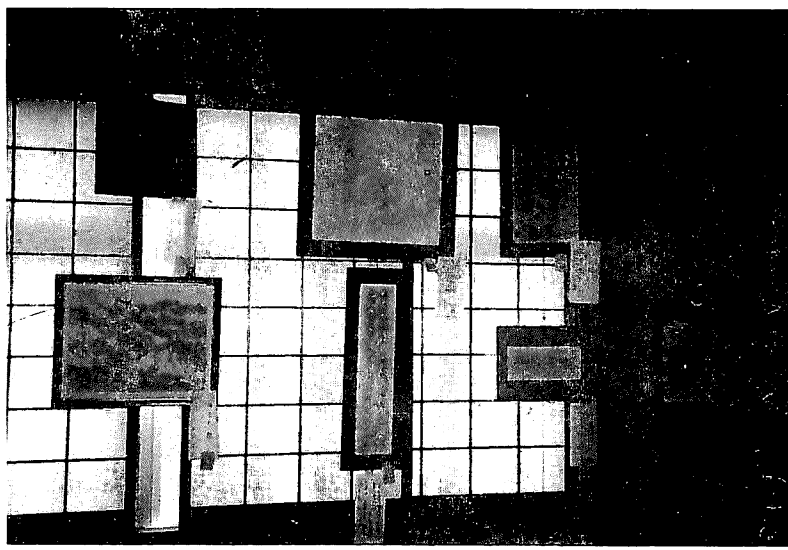
平成七年度活動状況

1　四月十三日（木）～十四日（金）
　　採拓旅行　信州千曲川萬葉公園　十一名

2　六月十六日（金）～十八日（日）



拓本作品展　　平城西公民館



拓本作品展　　平城西公民館

作品展　平城西公民館　五十一点　二十七名

3　六月二十九日（木）
作品展の反省会　北部出張所会議室

4　七月十日（月）
採拓　八尾市恩智第一万葉植物公園　九名

5　九月二十二日（金）
採拓　桜井市等弥神社・多武峰方面　六名

6　十月六日（金）
採拓　吹田市南千里公園　八名

7　十月二十九日（日）～十一月二日（木）
文化祭　作品展示　二十六点　二十六名

8　一月十日（水）
新年会　レストランローゼンポルカ　二十名

9　一月三十一日（水）
立体拓講習会　北部出張所会議室　十四名

10　二月二十四日（土）
立体拓講習会　北部出張所会議室　七名

11　三月十八日（木）
採拓　橿原市万葉歌碑　十二名

絵画の会

小西　淑彦

絵を描く楽しみ

火曜日ごとに奈良市役所北部出張所の会議室に、スケッチブック、イーゼルなど絵の道具を担いで集まる二十数名の仲間がいます。

三十代から七十代まで世代の幅はかなり広いのですが、共通の話題があると年の差はあまり気にならないものですね。とにかく熱心な皆さんの集まりです。

絵を描くのは一見難しそうで、始めるには決意が必要な人もいるかも知れません。私がそうでした。

しかし始めてみると思った通り楽しい集まりになりました。あなたも始めてみませんか。

新参で下手の代表の私ですが、指導の梶野先生から「下手でもいいから気にせず描きなさい。有名な中川一政さんのように、上手なのか、下手なのか判らないと言われる絵描きもいますよ。」と

上手におだてられると、すぐその気になってせっせと下手な絵を平気で描く始末です。

浄瑠璃寺にて

上手な人が多いので、人の描いているところを覗いては『成程このように描けばいいのか』など、参考にしています。大勢で描くのは人真似をしながら上達する利点があります。時節の良いとき奈良公園などにスケッチに出かけます。人の多いところでイーゼルを立てて写生をするのは、少なからず勇気がいるものですが、仲間がいると気が強くなって、平気で描けるようになりました。これも仲間の有難い効用でしょう。

「こんどはどのような絵を出そうかな?」

秋の展覧会が近づくと、皆そわそわ忙しくなります。

一昨年までは全員が水彩画でしたが、昨秋からは水彩、アクリル又は油絵と色も華やかに、見応えのある展覧会に変化してきました。

去年は有志の方々が三十号の大作に挑戦し、梶野先生の推薦で京都美術館の展覧会に出品されましたが、そのなかでも白松さん（八十歳）の製作意欲には一同脱帽でした。

絵を始めてからは名画を見ても、今までと違った目で鑑賞できるように思えます。これも絵の効用でしょう。

あなたも始めて見ませんか。楽しみが増えますよ。

俳句入門講座

岡　良子

今この原稿を書いている机の上方には、「梳る田打女の鍬ふと倒れ」という青年の日の春駒先生の「ほととぎす」の巻頭になられたお句の短冊がかかっております。この「梳る」というお言葉をもってこられたことに、お若い頃からすでに只者でない片鱗を見せていられると、感じ入って眺めております。私と先生との御縁は、平成元年五月に平城山句会に入会させていただいた事にはじまりますが、俳句との御縁はすでに、十九年前にはじまっていました。主人の勤務地の福井市に居ました頃、市の主催で「福井の文化を知ろう」というテーマで婦人を対象とした文化教室員を募集している新聞記事を見まして、四国徳島生まれの私には全く未知の土地でしたので早速応募しましたら、その講座の中の一つに俳句があったのです。元来読書は好きでしたが俳句にはさして関心はなく、「もし作るならおしゃべりの私には和歌がいいかな」位に思っていました。ところが二回目の講座で「さあ今から作りなさい。」と言われて頭をかかえてひねり出したのが「風のなか芒を探し土堤を行く」という句で之が私の処女作というわけで否も応もなくあっという間に俳句の世界に迷いこんでしまいました。回を重ねるにつれて今は故人になられた皆吉爽雨という方が福井出身の有名な俳人で俳人協会の役員もされており、俳誌「雪解」の主宰をされていられること。講座の本多静江先生も雪解同人であられる事などが追ひ追ひ分かって参りました。この教室は一年で終わりましたが、俳句をつづけたい方が十人程おられて世話役をたのまれ止めるに止められぬ事になってしまいました。受講中に季語のことや、俳句のイロハも解りかけて少しは面白味も湧き、今まで見すごしていた自然の変化や小さい草花にも目を注ぐ様になり世の中が広くなった様に思いました。この小さい集りを文筆句会と名づけて発足し同時に雪解の会員になりました。毎月一回の句会と、同時に作って来た句も提出して後日添削して送っていただきました。無季の句を出したり自分では発見と思ったのに、「これは当たり前のこと」などと書かれる失敗を重ねて一年程勉強させていただいているうちに大阪へ転勤となってしまいました。お別れの時先生が「大阪には雪解の会が澤山あるので止め

平成７年１０月。唐招提寺吟行

ずに続けて下さい」と言われました。全くの初歩から手とり足とりの如く教えて下さった先生に対して中途半端で止める様な失礼な恩知らずな事は出来ないと思った律義さが、その後の私を今迄支えてこられた様に思います。

大阪高槻での十七年間に「千里雪解句会」「雪解婦人句会」また御近所の団地の句会で勉強をつづけさせていただくうちに句も少しずつましな句が作れる様になり、俳人協会員にもさせていただけました。ところが昭和六十年に突然主人が脳梗塞になり、後遺症のしびれに痛みが添ふ様になり会社も止めて療養に専念することになりました。枚方にいた息子夫婦も心配して、一緒に助け合って暮らそうと云ってくれ、以前から用意してあったこの朱雀へ二世帯住宅を構えて移り住む事になり、春駒先生との御縁がはじまったわけです。丁度その頃の先生は、背中のお痛みがはげしくて背中に小さいおふとんを当てられ柱にもたれて御指導下さいました。主人が毎日痛い痛いと愚痴をこぼしながら病気の中に埋没していましただけに、先生の御指導ぶりには本当に頭の下がる思いでした。その後入院、手術で生死の境をさ迷ふ危機をのりこえられましたが、奥様の御協力をいただきながらもど

平成８年新年会。幹事西山さん宅にて

んな時でも俳句の御指導を怠ることなく頑張って下さいました。その生命がけの尊いお姿に私は瀕死のキリストをダブらせて涙ぐみつつお話を聞かせていただきました。その後先生は一年毎にお顔もふっくらなさり、若返ってこられたのでとても嬉しく存じます。主人も椿温泉で三ヵ月程湯治生活をしたのが効を奏して心身ともにしっかりとして帰宅し「今生の思ひ出にもう一度スペインへ行こう。」と言ひ出して私をびっくりさせました。「外国で再発でもしたら」と心配しながら出かけましたが、南欧の四十度を超す暑さが主人の体には幸いして無事スペイン。ポルトガル十三日間の旅を果すことが出来ました。私には本当に思いもよらなかった外国旅行の出来ました事を神仏に感謝しながら、記念の俳句も少し作る事が出来ました。しかし今は痛みがだんだん強くなってきて、温泉に出かける気力もなくし、私の外出もいやがりますので、雪解関係の句会も欠席ばかりで、今迄で一番どん底にいる様な感じがしています。春駒先生の御熱意に対して何とかお報いしたいと思ひつつも、句をつくる心のゆとりが、だんだんなくなって行く様で先生に相すまなく思っている現在でございます。早く暖かくなり主人の

例会互選中　平城西公民館

体調が上向いてくれます様にと願いつつ、先生の生命の平城山句会の足を引張ることのない様に私も頑張らねばと決意しております。

◆　◆　◆　◆　◆

牧野春駒

この稿が通り一遍の報告にならないように、一昨年から木村長子・込山山歩・岡良子の会員三氏の俳句とのかかわりについて書いて頂いた。三氏それぞれ、俳句というものが、それを作り始めてからの生きざまに大きく関わって来られたことを改めて感じ、俳句というものの魔力を知らされた思いであった。私の場合取組の熱心さに差があっても、空白の期間を除いて、もう四十年になるのであり、とくに最近の十年間は病気再発という苦しい事態の中で大変な心の支えになってきていることは、否定すべくもないのである。俳句を持っていて本当によかったとつくづく思っている。

勿論文化協会の俳句入門講座に入ってみようと思う人は、必ずしもそんな難かしい関わり方をされる必要はない訳で、人生をいろどるアクセサリーの一つとして、こ

ころみに手を染めてみられることをおすすめする。

「俳句入門講座」のこの一年間は、私が比較的元気だったこともあって、例会のほか、吟行、新年会なども楽しく行えたことを嬉しく思っている。

短歌を楽しむ会

松村せつ子

三十一文字に魅せられて

ニュータウンに入居してまもなく十八年になりますが、入居以来御近所で姉のように親しくつき合って下さっている会員の方から、私が雑文等書く事が好きと言いますと「短歌の会に入ってみない」と誘われました。

人の作品をよむのは好きですが、自分では一首も詠んだ事がなくただ五・七・五・七・七の言葉合せという位の認識しか無かったものですから、二つ返事でという事ではなく、チョット興味を感じ皆様の勉強ぶりをおそるおそる拝見に行きました。

その頃は筧先生が指導して下さっており、皆さんとても楽しそうに和気あいあいとお互いの作品を批評されており、先生もここはこう直した方がいいのではないかと言う位の講評で、こうしなさいという威圧的な言い方をされなかったので、何となく親しみが持て、溶け込めそうとお仲間に入れていただきました。

私の作る歌等は皆さんから較べますと大学生と幼稚園児以上の差はありますが、そんな事は気にもとめず自分流で自由に歌を詠ませてもらっています。

ここはこう直した方がいいのではと的確に批評していただけますので、下手な歌でも見ちがえる程いい歌に変ります。

この会に入会させてもらって良かったと思うことが二つあります。

一つは今まで知らなかった言葉やその意味が教えていただけますし、字等も覚え本当に頭の体操になります。もう一つの楽しみは私からみますと皆様人生の大先輩であり、その人なりの人生観、又生きて来られた体験や苦労話をお聞きしていますと本当に勉強になります。

自分の感じた事、思った事を五・七・五・七・七の言葉に変えてゆきますと自然と短歌らしくなります。

現在は筧先生が転居されて、主になって指導して下さ

る人はおられませんが、私以外の緒先輩方は皆さんが先生の代りをしてアドバイスして下さいますので、せっせと駄作を作ってはとてもいい歌に作り変えてもらっています。私の作る歌は古典的で正統的な本当に短歌らしいと思われる歌ではなく、どちらかと言いますと、俵万智さん風の歌になります。例えば、音もなく春の雨降る午下り歌集ひらきて一人愉しむとか、空白の春のひと日をのんびりと豆を煮ているこんな日も好き、とか、もっとひどいのになりますと、ねえあなた片手運転あぶないわ左手私に愛がいっぱい等なんだか交通標語のようなものを作ったりしています。チョット私には気恥かしくてよう作れないッと言われても、自分流で楽しんでいます。

たった三十一文字のなかにいろんな思いを入れて皆さんも言葉遊びを楽しまれませんか、一度私が入会させていただいた時のようにやじ馬のつもりでお出かけ下さい。きっと三十一文字の魅力にとりつかれますョ。

フランス語講座

片桐　一夫

私が初めてフランス語に接したのは、数学の先生より天空星座表を見せて戴いたときの、GRANDEUR DES ETOILES の文字でした。

そのとき先生からフランス語では星を、エトワールと言い、各々の星座の星は明るいのから逐次（ちくじ）、ギリシャ文字の順序で表されてゐることを教えてもらいました。

それからフランスの数学者であり哲学者でもあるデカルトのことや他の数学者のことも承ることが出来て、それが私のフランスの先人に対する憧れとなり、フランス語に関心を持った初めであります。

その後、私がフランス語の学修をと思い立ったのは、戦争中の昭和十六年夏にフランス語も分からず、仏印サイゴンに進駐したとき、現地の人からフランス語で話しかけられた時でした。即ちこの戦争で無事に日本に帰ることが出来たらフランス語を勉強しようと思ったのです。

フランス語は元来、外交官語で美しい発音の言葉でありました。サイゴンで話された言葉は恐らくは、初対面

のボンジュール、アンシャンテ等であったと思います。

さて今お世話になってゐる高橋先生のフランス語講座で、已に六年にもなりますのに、私は生来の不肖しかも老残の晩学で成果は上がらずですが、それでもある程度フランス語は分かるようになりました。考えればこのことは先生初め受講の皆様の同情によって、勉強させて戴いてゐる賜だと思います。

高橋先生は手数のかかる私に、いつも親切懇切に教えて下さいますし本当に頭が下がります。

また小山さん、木庭さん、小林さん、川口さん等、先輩の受講の皆様はフランス語が上手な方々で、よく助言して下さいますので有難いことです。

高橋先生の授業では只今は、『星の王子さま』の物語の本を勉強してゐます。この物語はフィクションですから、追に面白いものです。

高橋先生と授業日を交替して下さってゐる久保先生は『日本の生活』の本を教えて下さいます。これは沢山のイラスト入りで日本の住・食・遊などを紹介してゐる本です。また先生は、高橋先生から私共が前に習った初級の本をも、復習的に授業して下さってゐます。

久保先生も高橋先生と同じく、奈良市より選ばれて、フランスのベルサイユに留学なされた方で、やはりフランス語に堪能な先生であります。

思えば高橋先生も久保先生も、私共受講生のため一方ならぬボランティアを勤めて下さってゐるのです。

高橋先生は受講当初の私に、フランス語は綴りも大事だが、先づヒアリングに打込めと注意されました。

即ち私は今でも、ヒアリングになると、その発音が、エリジョンか、リェゾンか、アンシェヌマンか、何の動詞活用かなど、よく判別出来ず、折角の学習が是では駄目ですから、先生が申されるように、早くヒアリングに馴れることで、是を解決したいと思っております。

顧みれば先生が早く学習効果あらしめようと御教示下さる色々のことは、本当に有難く感謝申し上げねばならないことばかりであります。また前記しましたように受講先輩の御助言も有難いことです。

若き日に思い立ったフランス語が、この様な雰囲気で勉強出来ることは、本当に幸せなことであります。

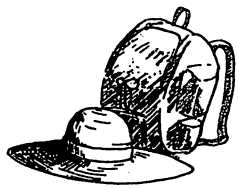
以上、先生初め受講先輩の皆さんのこと、それに私のプライベートのことをも申し上げて、このフランス語講座のグループ便りと致します。

山歩きの会

西幹　友雄

山歩き　と　体力

山には特別な体力はいらない。しいていえば持久力のある足の筋肉と、ある程度の重さのザックを背負える背筋力があればよい。他のスポーツに比べると体力はさほどかわらないとおもいます。ただ汗をかくのが心地良いと思えない人は困るそれと当たり前だが、歩くことが極端に嫌いな人も山登りはできない。自然が好き、歩くことが好きならば山歩きに向く体力があるとおもいます。そしてあきらめない精神力がそなわっていれば、山はのぼれます、山は山ほどある。それも様々な標高、地形、距離、自然形態があり、千差万別それぞれの体力におおじた山がありますだから老若男女関係なくその素質をもっています、山登りの嫌いな人以外は誰でもが楽しめるスポーツとおもいます。体力で一番必要なのは脚力であり実際山であった話しですがバテではなく突然足が前に出なくなる人がいることを聞きました（私も一、二度ありました）上半身は元気なのに腰から下の動きがチグハグ



霊仙山頂上にて

になり体力的にいって脚力が基本的によわいと思います。こういった人は、足の筋力が鈍っていますので毎日散歩をするとか、自転車に乗るかして出来るだけ足を動かすようお進めいたします。山は足で登るものではありますが無理なトレーニングでなく気持良い汗をかくくらいの運動で、まず足から鍛えましょう。

平城ニュータウン（山歩き会）も四月で10年目を迎えました、これも文化協会の会員の皆々のご支援のお蔭だと感謝しております。この10年で行った山は岩湧山（第一回）始として115回であります、これからも協会がつづく限り山歩きをいたしますので宜しくお願いいたします。

今年度の登山計画は次の様になります。

四月度　六甲山　五月度　皆子山　六月度　三郎ヶ岳
七月度　桟敷山　八月度　（白馬岳又は立山）　九月度　摩耶山　十月度　金剛山
十一月度　紅葉谷から天狗岩　十二月度　愛宕山

英語講座

鎌田　時栄

この講座が始まってから、満七年が経ちました。平城東公民館で、第一、第三土曜日の午前九時半より、十二時近くまでやっております。前半一時間程を初級クラスとし、現在は、中学校で使っている、New Horizonを教材にしています。後半一時間程は、マクミラン社からでている、Listening Challengeを教材にし、講師も含め皆で悪戦苦闘しつつ頑張っています。初級と中級の合間はその日の講師の気分で、歌になったり、ことわざになったり、会話になったりしています。九時半から十二時まで、頑張ってくださる方、前半だけ出られる方、後半だけ出られる方、いろいろですが、皆様、御自身とのご相談で決めていられます。

現在十六名の方が出席されており、この春から、新たに、三名の方を迎えます。他に、約六名の方が休会という形でおられます。講義形式の授業ではないので、やむなく人数が限られ、申し込んで頂いた方々に、待っていただく事も多々あり、申しわけなく思っております。も

1995年7月
左京のダイワハウスの研究所を訪問し、
その後、食事会をしました。

し望むことができるのであれば、どなたかもう一方ウイークデイに「英語の講師してもいいですよ」、とおっしゃる方がいらっしゃらないかなということです……。

講座として文化祭に参加もせず、怠慢なことをしていますが、内部では、七月には、皆で外食をし、一月には、新年会と称し一品もちよりパーティーをしています。一月の会では、英短文等の暗唱会も兼ねていますが、それ以上に、皆が持ち寄ったおいしい料理の講習会的様相のほうが強いみたいです。とにかく楽しい一時を過ごしています。

最後に平城東公民館の館長様はじめ、職員皆様方の暖かいご協力に対し心より感謝申しあげます。

万葉講座

大浦小枝子

『万葉集』と浪花節

大和路見学会で室生寺に行ったことがありました。その時、軽い気持ちで二・三人の者が、松岡先生に『万葉集』の講義をお願いしましたら、心よく引き受けてくださったのですが、これほど徹底的に勉強されて、松岡流に教えてくださるとは思いもかけぬことでした。

先ずはじめに軽い気持ちでお願いしたことは不真面目なことであったと反省していますが、これ程楽しい万葉講座は日本中数多ある『万葉集』の講座の中でも、平城NT文化協会の講座だけではないでしょうか。その恩恵に浴せる私達の幸運を噛み締めております。

前書きが長くなりましたが、この講座も平成元年からはじまりまり八年目に入っております。最初は私達が生活している、この地の近くで詠まれた「巻一・八四」の長皇子の「秋さらば　今も見るごと　妻ごひに……」の歌を入り口として教えていただいた歌の数は、数えき

れない程になりました。プリントされたお手製のテキストだけでも二五〇枚にもなっております。去年は東歌を、そして今は防人の歌を勉強中です。

去年十月から入りました防人の歌についても、先ず「巻二十」のアウトラインや大伴家持と防人の歌の配列順序などの説明がありました。そして、この「巻二十」に関して是非先に勉強した方が良いだろう――と言う事で、『万葉集』の最後を飾る持家の

あらたしき　年の始めの　初春の　今日零る雪の
いや重け　吉事　（四五一六）

を味わい、この歌の意義について色々話合いました。

防人の歌に関しては、防人の任務、防人と東国との関係、防人の廃止と言う歌以外の知識も教わり、又、進上歌数（一六六首）の中の拙劣歌数（八二）はとりあげられなかったということについて、先生は落とされ捨てられた歌も、残されていればその時代の東国の風俗や庶民の暮し、考え方など今の『万葉集』の勉強に得るところが多かったのでは、と残念そうに言われます。

家持の、

「防人の別れを悲しむ心を追ひて痛みて作れる歌
一首　短歌を并す」　（四三三一～四三三六）

などを教わりますと、今迄漠然とした知識しかなかった私など、今迄は歴史上だけの存在であった家持のあたたかいやさしい人柄に触れて、新発見のごとく嬉しい気持ちになってしまいます。

そして、ここからは私の空想なのですが、家持など高級官吏の歌は、本来の『万葉集』の雰囲気を脱皮し、次の『古今集』への過渡期的な歌風になりつつありましたのに、東国出身の防人達の上や暮しの匂う歌のどのような部分に優劣をつけたのか――詠み方か、又、五七五七七の配列か――短歌に少し興味のある私としては、今の歌会の勉強の原点がここにあったのではないかと思うことです。

又、防人の歌は、難波で集められていますが、家持が「巻二十」を編集したのは因幡の国廳か、又、平城京か、何処だったのでしょう。もし平城京だったとしたら、劣

歌の書かれた木簡がまとめて井戸や溝にでも捨てられていて、平成の世に出土したらどんなにか楽しいことでしょう。先生の夢も適うことになります。

先生は、常々「東歌は演歌だょ」とおっしゃっておられますが、防人の出身地も東国なので、この様な気持ちを持ってのお講義なのか、

わが妻は　いたく戀ひらし　飲む水に　影さへ見えて　世に忘られず　（四三二二）

の歌から

月が鏡であったなら
　恋し　アナタの面影を
夜毎　映して見ようもの　……。

と、先生のお口から現代風の東国がうたわれます。

この事から、松岡流万葉は、脱線『万葉集』であり、松岡節は演歌（ナニワ節）とおっしゃる故です。

脱線『万葉集』に親しんでくださる方が増えますことを願いつつ、最後に、

先生、いつまでも御元気で、私達にいろいろ御教示くださる事を、この紙面をお借りしてお願い申し上げます。

・・・歩く会

廣田　省吾

「もしもし、今度歩く会に参加したいと思いますが、初めてで、私でも歩けるでしょうか。」

「？？？」

「歩く会」が近づくと、電話がかかってきます。勿論「・・・歩く会」に参加しようとする気持ちがあれば、大丈夫歩けます。

「・・・歩く会」は、寒い季節、暑い季節を避け、原則として同じコースを奇数月は第3金曜日、偶数月は第3日曜日に、歩いております。平成七年度は左記の様に歩きました。

四月十六日　山の辺の道　北コース（二回目）曇時々雨

近鉄天理駅から、大和高原の麓、東海自然歩道を北へ

橘諸兄公旧趾にて

歩く。「十三参り」、「高樋の虚空蔵さん」で有名な弘仁寺迄。天気が悪かったのですが、歩いている時は、不思議と雨が止んでいました。（参加人員十一名）

五月十九日　井手の里　晴

ＪＲ平城山駅乗車、奈良線玉水駅で下車。桜並木と山吹で有名な井手の里を歩きました。駅から南へ、五分も歩くと桜並木の玉川堤に出て、山の方へ行くと平安六歌仙のひとりの小野小町の塚があり、更に上ると玉津岡神社、左側には京都円山公園の兄弟と言う「しだれ桜」のある地蔵院が、井手の里が一望出来る高台に建っています。

東へ歩くと、平安時代後期、女芸上達を祈って「左馬」の半肉彫りが刻まれた巨大な岩がある左馬ふれあい公園で昼食。食事後竹林の中を通り、奈良にもゆかりのある橘諸兄公旧趾を訪れる。町の中にある諸兄邸の邸内にあったと言われる六角井を見て玉水駅へ。玉水駅構内には昭和二十八年の南山城水害で流れて来た岩があり、今更ながら自然の威力に驚きながら帰途に着きました。

（参加人員　天候にも恵まれて　三十一名）

東明寺にて

六月十八日　井手の里　（二回目）曇後雨
前回の井手の里と同じコース。天候が悪く、左馬の帰り道から雨が降り出したので、玉津神社の絵馬堂で昼食を摂りました。（参加者九名）

九月十五日　矢田丘陵　雨で中止

十月十五日　矢田丘陵　晴
高の原駅九時十九分発橿原神宮前行に乗車、近鉄郡山駅よりバスで「あじさい」の寺、矢田寺へ。矢田寺から山麓を通り東明寺へ。上り道もあり、息を切らせて到着。
本堂で、木造薬師如来坐像を拝観する。東明寺の裏を上って行くと、やがて緑あふれる広場に出る。「子供の森」である。ここで昼食。しばし疲れをとり出発。これから下りである。しばらくして気が付かなければ、つい通り過ごす様な細い道を滑らない様に、落葉を踏みしめ下りて行くと滝寺廃寺跡がある。往時をしのぶべきものは無いが、白鳳時代の曼陀羅磨崖仏さんが、ひっそりと小さなお堂の中におられました。下り道の農家の入口の上に、駕籠がぶら下がっているのを見上げて意味も無く、

土舞台趾にて

感心したり、わいわいがやがや。「飛行神社」の名で親しまれる矢田坐久志玉神社を経て、大和民俗公園内の、奈良県下の文化的価値の高い民家を見て本日の予定は、終了しました。（参加者二十名）

十一月十七日　桜井市南部方面　晴

九時二十分発橿原神宮前に乗車、近鉄桜井駅下車。駅より南へ、国道一六五号を横切ると、もう古いたたずまいの道です。路地の様な細い道を右へ入ると、桜井の地名の元となったと言われる井戸があります。若桜神社から艸墓古墳へ。周囲に民家が狭っています。桜井商高の近くの上之宮遺跡から土舞台へ。石舞台は有名で、よく知られていますが、土舞台もあるとわ。やや高台の公園になっております。次に知恵の文殊さんの安倍文殊院寺内にある西古墳と東古墳を見て、耳成山、香久山、が見通せる高台で食事。ふと下の広場を見ると、子年の干支鼠を花で、作っておられました。谷首古墳から、文殊院の前身の旧寺地と推定される安倍寺跡を通り、稚桜神社から御厨子神社へ到着。境内には裂目のある自然石がありました。ここから北へ近鉄大福駅迄、快晴に恵まれ

楽しい一日でした。（参加者二十四名）

平成八年三月十七日　桜井市南部（二回目）雨で中止

「窓口」を引き継いで、又と言うか、もうと言うか、一年が経ちました。参加して下さる方々が、満足してもらえただろうかと気がかりです。帰途楽しそうな顔をしておられる方を見ると、ほっと致します。

何時も嫌な顔もせずに下見に付き合って下さる方々、資料を見せていただいた方、そして何時も参加して下さる方々、ありがとうございます。今後ともよろしく御願いします。

筥作りの会

岡田　越子

私が　筥作りの会　に入れていただいたのは、平成六年十一月十三日の第二月曜で、皆が色々な物を作っていらっしゃるのを見て、私も是非してみたいと心を踊らせたのです。

それまで第二・第四月曜日は、お茶の稽古に通っていましたので、午前中は筥作りの会、午後はお茶の会へ出て行く、と言う中でなかなか落ち着かず、作っている作品も一向にはかどりませんでした。それでも習字の半紙を入れる箱が出来た時は、大変嬉しく、同じ物を二つ作り、一つは嫁にあげたらとても喜んでくれました。

年がかわってからは、屏風を作って雛祭りに飾ったり、兜を作ったりして大いに楽しみました。

六月十二日には筥作りの会より京都へ行き、平安神宮でしょうぶなどの美しい花や建物を見て廻り、お昼は文化博物館のきた村でとり、和紙などを買い求めたりしてゆったりした一日を楽しみました。

そうして、お茶の会の人に、私の無理をお願いして、お稽古の日を変更して頂き、六月からは筥作りに専念出来るようになり、古い方にまじって文化祭の作品、引き出し付きの飾り棚を作るのに精を出しました。その間にデコパージュの先生の杉山先生に、籠に可愛い模様をアップリケする方法を教えて頂き、これも三つ作り、嫁と娘と三人で分け、喜んでもらえました。

十一月二十七日は「御逢詞巣（おあしす）」で忘年会、活魚料理に

舌つづみを打ちました。黒一点の中野先生の赤い顔が印象的でした。

年末には、版画で色々と楽しい年賀状を教えて頂きました。

その他、私の今までの作品は、ソーメン箱二つで。新聞の『平家物語』の姫やクレオパトラの切り抜きで、デコパージュの箱を作りました。金具は先生に付けて頂いて……。花入れ二つ。くず入れ、つま楊子入れ、道具箱等楽しい作品ばかり、人の物を見ると、又、あれがしたい、これもしたいと思う〝筥作りの会〟です。

これ程楽しく、心がなごむのも、中野先生のお人柄で、何をしても、うん　うん　と気軽く教えて下さり、出来ない処は、何でも引き受けて下さり、先生！、先生！と引っ張りだこです。

又、杉山先生も一緒に色々と教えて下さり、とても楽しい会です。只今は満員との事で、会を二つに分ける話もあるようです。

一度、見学にいらして下さい。とりこになりますョ。

パッチワーク研究会

吉川　晋子

パッチワーク。――一度ぐらいは、何か作られた経験のある方も多いと思います。私も以前、パッチワークがこの地域でブームになった時、友達に誘われて習っていたのですが、いつの間にやら、お蔵入りとなっていました。

ところが、去年の六月平城ニュータウン文化協会同好会一覧でパッチワーク研究会が目に止まりました。私は、早速のぞいてみました。すると皆さん、それぞれご自分の作りたい物を、自由にパッチワークしていました。小さなモチーフ、可愛い巾着袋、古典調のタペストリー、ログキャビン、特に先生の芸術的で色彩豊かなベッドカバーには、圧倒されました。私もベッドカバーとまではいかなくとも、テーブルクロスぐらいなら作れるかなと思い、入会させて頂き今日に至っています。

今年は、歳時記にちなんだ作品を、例えばお雛さま、こいのぼり、花菖蒲、もみじ……などをパッチワークでと張り切って作っています。一度気楽にのぞいて見て下

さい。こま切れの時間をつないで、一端の布切れから、あなただけのオリジナルの作品を、作ってみませんか。

手踊り同好会

毛利　公子

手踊り同好会も、文化協会のお仲間に入れていただき二年を迎えようとしています。

月二回のお稽古、楽しみながら続けています。右京集会所で、第一と第三の金曜日、午前十時から十二時までです。休憩のお茶とおしゃべりも、楽しみのひとつです。

タンスに眠っている和服、着てみたいなと思われる方一度のぞいてください。着付けや、簡単な帯の結び方もいっしょに勉強しましょう。

踊りに興味のある方なら、誰でも手軽に楽しめる、手踊りですが、深めれば舞台に出ることもできます。

七月から「祇園小唄」を踊っています。なじみのある歌を口ずさみながら、ぐっと若がえって可愛く踊れたらと思っています。

四月から、学園前にある老人ホームへも、手踊り同好会から、ボランティアで行かせていただいています。

皆様、椅子に座って頭や手等、上半身を動かせて、生き生きと楽しそうに踊られます。九十才以上の方も何人かいらっしゃいますが、私もあの年まで踊れたら嬉しいなと思いながら、がんばっています。

野草をしらべる会

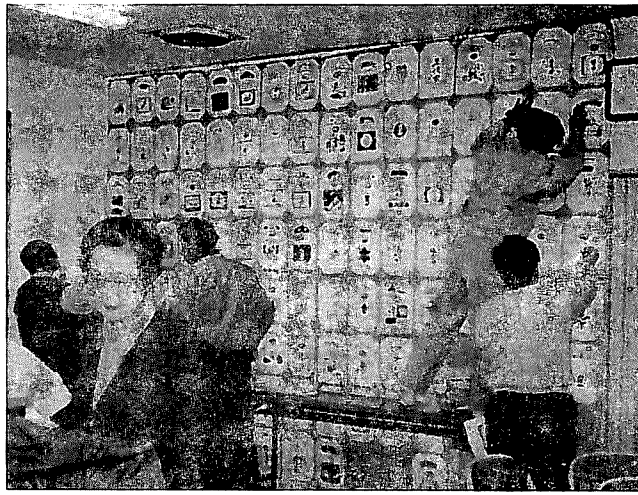
前川　良雄

薬草について

山菜や薬草を味うには山歩きが欠かせない。山野を気ままに歩き、目指す植物に出合い、それを摘む楽しみが、食べる楽しみより大きい。四季折々の風景をめで、小鳥のさえずりを聞きながら、野草をつむのは何ともいえぬ楽しみである。春の野草の中葉の大きいのはギシギシである。これの根を掘りとり煎じて飲めば便通がよくなります。秋になってつけた実が上下にふるとギシギシと音がするのでこのような名がつきました。同じく春に黄色のかわいい花をつけるカタバミは葉が三枚で縁が欠けているのでカタバミと呼ばれ、葉をもんでその汁を切り傷

にすりこむと止血の役目があります。黄色のカワイイ花を咲かせて、地面をはうようにのびて、日没になると花も葉もとじてしまい、実はさわるとポンとはじけます。スイバはギシギシに似ていますが、色は赤味がかって食べるとスッパイのでスイバと呼ばれます。これは水虫やタムシのような皮膚病によくきく。スギナはツクシのことで同じ地下茎より生えている。利尿によくききます。煎じて飲めばよい、九州の南部や沖縄には生えない。やせた砂地を好んで生育する。春らんは中心の花の枝を取りハカマをそうじして、サッとゆでて水にひたし、おしたしやあえもの、天ぷらにするのがよい。セリは春の七草の代表的なもので、ビタミンCが多い。タビラコは早春の香りを味うもので、春の七草の中のホトケノザと呼ばれている。タンポポはおだやかにきく苦味性の健胃剤である。ナズナはビタミンCに富み高血圧の予防にきき、ペンペン草ともよばれている。ノビルは大きく三〇㎝ぐらいの枝の先に赤いかわいい花をつける。球根をすって飲むとせきどめによくきく。ハコベに塩をまぜてもむと歯磨の代用品に使われる。ハハコ草は利尿にきき、むくみがとれます。フキは根を陰干しにするとたんをきり、せきをしずめる。ヤブカンゾウは眠れぬ時に根10グラムの煎液を食間三回わけて飲むと眠れない時によく眠れる。ヨメナは萬葉人もよく食べた早春を代表する若菜である。ヨモギは入浴剤や下痢止めなどにきき、お灸用のモグサにもなる。野原でヨモギをつみ餅をつくると春一ぱいの香りがあたりにひろがる。アカツメ草、シロツメ草は荷物を送る時すきまにつめたのでつめ草とよばれる。一名クローバーともよばれる。アメリカで強壮剤として用いられる。アザミの根の煎液をのめば利尿効果がある。イタドリの根茎は便秘、せきどめにきく。やけどの薬にもなる。オオバコは副作用なしの安全せき止めにきく。カラスノエンドウは胃がもたれた時煎液を飲むとスッキリとします。キキョウはたんきり、せきどめによい。スミレは食用になり薬用も効果あり。ゼンマイは保存がきき年中食べられる。茶は健康保持に役立つ、ドクダミは湿疹やはれものにきく、ヤブガラシは虫さされの時によくきく、レンゲ草はビタミンBが多く、アミノ酸も豊富である。他にたくさんの薬草があるが、野原を歩いて野草を見ながら薬の効用を思い出して、かわいい葉や花を鑑賞して見るのも大へんな楽しみではありませんか。

第十三会文化祭記録



展示の部

◎前期　十月二十九日～十一月二日

◆拓本　込山　博介　岩井　静栄　宇野木千代
北本　敏子　黒田　節子　黒田　忠勝
沢田　実子　白松　春子　鈴木　玲子
宗徳　郁雄　高橋　友示　高橋はる江
竹本　千鶴　土岐　絹枝　南村　勝次
南村　照栄　中村　弓子　西尾　弘子
西島　芳子　西山佐代子　広田　省吾
藤原　香　堀池　敏子　堀池　光合
山田　正子　渡辺　亮斗

◆短歌　網干　善教　荒居　智子　宇野木久代
大浦小枝子　岡田　越子　片桐　一夫
木庭　和子　沢田　実子　玉置　小代
中川都哉子　藤原　香　松村せつ子
森田　陽子　山崎たみ子　棉源　瑛子

◆俳句　牧野　春駒　伊藤　柳紅　上原　高美

大浦小枝子　岡　良子　柏木　一枝
川口シズヱ　喜多　まさ　木村　長子
込山　博介　坂本よしゑ　辻田しま代
中川　君子　南村　照栄　西岡　智子
西田たまみ　西山佐代子　福井としみ
藤沢　陽子　堀池　敏子　牧野　和代
三井サチ子　森田　陽子　和田美代子

◆写　真
赤坐　右一

◆ちぎり絵
柴田八重子　大谷　桑子　柏木　一枝
喜多　まさ　周藤　智子　辻田しま代
西山佐代子　山内　梅乃

◆笥作りの会
中野　昭三　榛原千鶴子　岩井　静枝
岡田　越子　奥村　淳子　菊池　瑠璃
北村　源子　幸路　喜代　柴田　静枝
杉山　啓子　高橋　笑子　陣内　満子
土井　正子　広崎　光子　山内　梅乃
山元　洋子

◆地酒の会
日本酒ラベル　写真

◆園　芸
北村　孫衛　杉山　啓子

◎後　期　十一月三日～十一月七日

◆書　道
岡田　越子

◆絵　画
梶野　哲　青木　光子
大野　貞男　岡本　幸子　石崎　路子
込山　嘉代　小西　淑彦
沢田　昌江　沢田　実子
島川　正行　白松　春子　出口真喜子
南村　勝次　服部　純世　広田　省吾
堀池　光合　村岡ちい子　山崎　明
吉沢　幸江

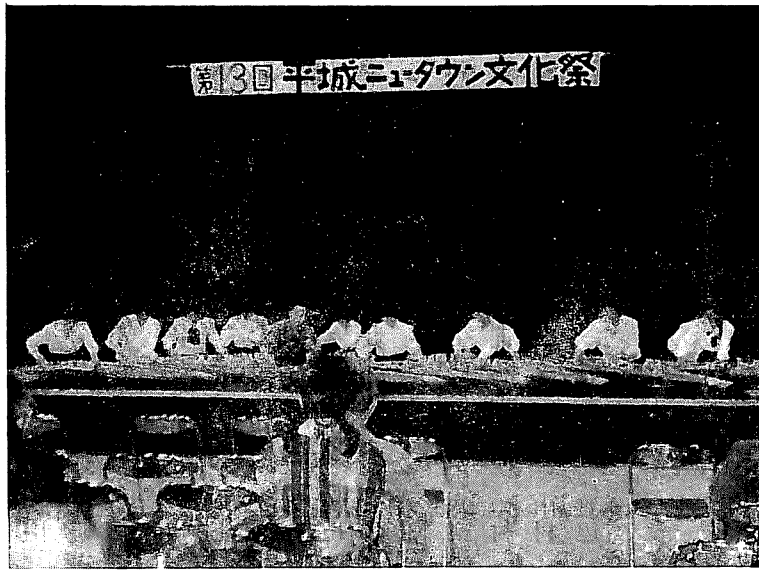
◆押絵
木目込人形
谷口　直子　網干佐和子　石森千代子
木村　長子　島田　守恵　菅原　静子
西岡　智子　東山　幹子　陣内　満子
鷲塚　順子

◆パッチワーク
打田　照子　榛原千鶴子　岡田　越子
周藤　智子　砂本　敏子　野川タカ子
林　美智子　林　博子　三輪　久恵
山内　梅乃

◆デコパージュ
杉山　啓子

◆園　芸
北村　孫衛　杉山　啓子

◆木　彫
井ノ山一雄



上演の部

◎ 十一月三日

◎ 高の原コミュニティスポーツ会館

◆太　鼓　右京太鼓連

◆舞　踊「鶴亀」久門　富美

「春雨」坂東よし美

◆マジック　田野　岩井

◆けんだま　神功バンビーホーム

◆詩　吟（その一）　詩吟の会

ナレータ	木村　長子
コンダクター	大迫くき枝
（吟　題）	（作　者）　（吟詠者）
白虎隊	佐原盛純　林　直一
白帝城	李白　細川　昭子
舟中聞子規	城野静軒　陣内　満子
大楠公	徳川斉昭　中川　君子
涼洲詞	王翰　超智　信子
中庸	元田永孚　都築　重徳

◆舞　踊　秋月会

「春秋の舞」　新田　慶子

「かっぽれ」　井坂　君江

◆詩　吟（その二）　詩吟の会

ナレータ　木村　長子

コンダクター　大迫くき枝

（吟　題）　（作　者）　（吟詠者）

弘道館賞梅花　徳川斉昭　花田　克子

出郷作　佐野竹之助　吉田　輝子

舟中聞子規　城野静軒　中西　迪子

◆扇　舞　谷口　秀敏

◆中村昭三クラッシックギター演奏　高の原音楽院

・バーデン　ジャズ組曲　作曲イルマル　中村　昭三

・二重奏　ポールモーリア　中村　昭三

オリーブの首飾り　渡辺　純子

涙のトッカーター

タルレガ

アルファンブラの想い出

・グラナダ　ララ作曲　中村　昭三

◆舞　踊　手踊り同好会

「赤トンボ」　毛利　公子

山内　梅乃

「深情け」　毛利　公子

◆男性カルテット　南本　豊樹

トップテナー　吉田　勝

リードテナー　勝田　衛

バリトン　高橋　仁

ベース

◆箏　曲　ぐるーぷ翔　沢井　忠夫作曲

螺鈿

Ⅰ箏　田頭雅千香　古関　弘美　比良　尚美　福井　栄子

福川　悦子　林　千鶴　住山えつ子

Ⅱ箏　南湖雅千紗　山内　正子　中嶋　恵子　河本雅楽州

十七弦　菊池雅千絵

虹　松本　雅夫作曲

乱　田頭雅千香　南湖雅千紗　古関　弘美　比良　尚美

山内　正子　中嶋　恵子　福井　栄子　福川　悦子

林　千鶴　住山えつ子　加藤タカ子　河本雅楽州

虹　菊池雅千絵

1996年度（平成8年度）

第14回平城ニュータウン文化協会総会

日　時　1996年5月6日〔月〕
開会　PM1：30
場　所　北部出張所会議室

Ⅰ　開会の辞
Ⅱ　会長挨拶
Ⅲ　来賓祝辞
Ⅳ　議長選出
Ⅴ　議　事
(1) 1995年度事業報告
(2) 1995年度会計報告・監査報告
(3) 1996年度事業計画（案）
(4) 1996度予算（案）
(5) 役員選出の件
(6) その他
Ⅵ　閉会の辞

第14回総会　**記念講演**　午後2:30から

『考古学からみた　飛鳥』

講師　関西大学教授
網　干　善　教

１９９５年度事業報告

1995年 4月15日　協会報発行　全戸配布
15日　神功・右京地区主催の歓送迎会出席
18日　厚紙と和紙で作る「兜」１日講習
29日　第１３回（1995年度）総会
記念講演「大化改新１３５０年に思う」講師　網干 善教先生
5月 2日　ニュース１号発行
6月25日　春の大和路見学
「飛鳥の大化改新・関連史跡探訪」……現地説明　網干 善教先生
7月 1日　ニュース２号発行
13日　デコパージュ１日講習
20日　映画観賞会協力
8月29日　常任理事会
31日　奈良市防災訓練・防災センター参加と見学（右京自治連合会主催）
9月 1日　ニュース３号発行
26日　右京小学校運動会出席
10月 9日　観月の会
10日　秋の大和路見学　「新宮山古墳」……現地説明　網干 善教先生
15日　協会報発行　全戸配布
23日　協会誌「層富」第12号発行
10月29日～11月 8日　文化祭開催
29日　記念講演　「酒船石遺跡と飛鳥京木簡」　講師　網干 善教先生
11月 1日　ニュース４号発行
29日～11月 2日　前期展示の部
拓本、短歌、俳句、写真、園芸、筥作りの会、地酒の会、ちぎり絵
11月 2日～11月 7日　後期展示の部
書、絵画、一日講習作品、押し絵・木目込み人形、パッチワーク、園芸
3日　上演の部（神功自治連合会協賛）
詩吟、舞踊、箏曲、ギター独奏、マジック、けんだま、太鼓連
男性カルテット
3日　お茶席開催
5日　囲碁大会
7日　ごくろうさん会
11月10日　ニュース５号発行
30日　「ちぎり絵」講習会（千支）　柴田　八重子先生
12月15日　「新春を祝う会」の打ち合わせ会議
24日　〃　〃
1996年 1月 1日　ニュース６号発行
7日　第１３回「新春を祝う会」参加
2月 1日　ニュース７号発行
3月28日　役員会、理事会・常任理事会開催

1995年度　決　算　書

平成7年4月1日～平成8年3月31日

【収入の部】　（単位：円）

項　　目	予　　算	実　　績	増　　減	備　　考
前年度繰越金	354,510	354,510	0	
会　　費	525,000	579,900	54,900	(@1,500×386)+900
後　援　費	100,000	100,000	0	各自治会自治連合会より
寄　付　金	10,000	30,000	20,000	講師先生・文化祭祝い金
雑　収　入	28,490	34,014	5,524	銀行利息、券収益金
小　　計	1,018,000	1,098,424	80,424	
積　立　金	100,000			
合　　計	1,118,000	1,098,424	80,424	

【支出の部】

項　　目	予　　算	実　　績	増　　減	備　　考
事　業　費	100,000	58,503	41,497	文化祭、セミナー
助　成　金	66,000	69,000	△3,000	講座、同好会
会　議　費	20,000	4,360	15,640	会議、資料、他
広　報　費	500,000	385,640	114,360	会誌、会報、ニュース
事　務　費	30,000	15,609	14,391	事務用品、他
印刷、消耗費	150,000	72,100	77,900	コピー機修理代
通　信　費	18,000	2,160	15,840	郵便料
渉　外　費	30,000	16,281	13,719	協賛費、祝金
雑　　費	50,000	20,000	30,000	
予　備　費	54,000	0	54,000	
積　立　金	100,000	100,000	0	コピー機買い替え
小　　計	1,118,000	743,653	374,347	
次期繰越金		354,771		
合　　計	1,118,000	1,098,424	374,347	

平成７年度積み立て預金　101,534円
積み立て預金合計額　202,220円

1995年度会計につき帳簿・証票など監査した結果適正であることを認めます。

1996年 3月31日　監　事　大　浦　小枝子　㊞

監　事　渡　邊　亮　斗　㊞

１９９６年度事業計画

――はじめに――

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究、創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

――おもな計画――

1．講演会の開催　　総会記念講演
　　文化祭記念講演
2．セミナーの開催
3．会誌『層富』の発行
4．会報の発行（全戸配布）　　文化協会案内号
　　文化祭案内号
5．ニュースの発行（隔月発行予定）
6．大和路見学会　　春１回
　　秋１回
7．文化祭の開催
8．観月の夕べの開催
9．年間を通じて趣味の講座開催
10．平城ニュータウン新春を祝う会参加
11．その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

１９９６年度　予算

【収入の部】

項　　目	金　額	備　　考
前年度繰越金	354,771	
会　　費	555,000	@1500×370
後　援　費	100,000	各自治連合会より
寄　付　金	10,000	
雑　収　入	20,229	銀行利息他
積　立　金	100,000	
合　　計	1,140,000	

【支出の部】

項　　目	金　額	備　　考
事　業　費	100,000	文化祭、セミナー他
助　成　金	69,000	講座、同好会への助成
会　議　費	20,000	会議、資料、他
広　報　費	500,000	会誌、会報、ニュース他
事　務　費	30,000	事務用品
印刷、消耗品費	150,000	印刷機器消耗品、コピー
通　信　費	15,000	郵送料、電話代
渉　外　費	30,000	協賛費等
雑　　費	60,000	各項目に該当しない必要経費
予　備　費	66,000	
積　立　費	100,000	印刷機器買い替え費（別会計）
合　　計	1,140,000	

平城ニュータウン文化協会講座・同好会一覧

電話局番＝（７１）

	番号	講座・同好会	担当者	電話	曜日・時間	予定会場
定期	1	歴史教養講座	網千善教	6510	第２火曜（10時～12時）	北部出張所会議室
	2	古代史講座	鬼頭清明	2997	概ね第４火曜（14時～16時） 問合わせ　西島（72－0335）	〃
	3	囲碁同好会	中村正雄	0106	毎日曜日（13時～18時）	平城西公民館和室
	4	木目込人形・押絵同好会	（窓口） 石森千代子	3183	第１・３水曜（10時～14時） 指導・谷口直子	北部出張所会議室
	5	読書会	（窓口） 山内梅乃	1654	第４金曜（10時～12時）	〃
	6	中国語講座	久富木幸子	5015	96年度休講	〃
	7	詩吟の会	大迫くき枝	2533	第１・２・３水曜 （10時～12時と13時～15時）	〃
	8	地酒を味わう会	中村正雄	0106	第２土曜（18時半～）	不定
	9	園芸の会	北村孫衛	0823	第４月曜（13時～16時）	自宅 （右京4丁目7－5）
	10	拓本を楽しむ会	込山博介	5058	毎月１回（日時・場所はその都度事前に会員に通報）	北部出張所会議室
	11	絵画の会	梶野哲	3295	第１・３・４・５火曜（10時～12時） 第２火曜（14時～17時）	〃
	12	俳句入門	牧野春駒	1777	第３木曜（13時～16時） 問合わせ　西山（71－4950）	平城西公民館和室
	13	短歌を楽しむ会	網千善教	6510	第３火曜（13時半～16時） 問合わせ　木庭（71－3494）	北部出張所会議室
	14	フランス語講座	高橋節子	8253	毎月曜第１・３（10時～11時半） 〃　第２・４（14時半～16時）	〃
	15	山歩きの会	西幹友雄	6102	第２土曜 （雨天中止の場合は第３土曜）	野外
	16	英語講座	鎌田ハルエ時栄	3150	第１・３土曜（９時半～12時）	平城東公民館
	17	万葉講座	松岡禮一	2964	第１月曜（13時半～15時半） 第１・３水曜（19時～21時）	北部出張所会議室 （右京団地集会場）
	18	…… 歩く会	（窓口） 広田省吾	0207	奇数月第３金曜日、偶数月第３日曜日	野外
	19	筥（はこ）作りの会	中野昭三	3258	第２・４月曜（10時～16時）	北部出張所会議室
	20	野草をしらべる会	前川良雄	0682	春・夏・秋年に３回程度	野外
	21	パッチワーク研究会	（窓口） 山元洋子	5138	第２・４金曜（13時～16時） リーダー・打田	北部出張所会議室
	22	手踊り同好会	毛利公子	1989	第１・３金曜（10時～12時）	右京集会所
	23	写真同好会	赤坐右一	0111	概ね月1回土曜日、ニュースで通報	野外
不定期	24	源氏物語研究	☆浅田知里	1258	希望者は電話で申し込んで下さい	未定
	25	星を見る会	☆此下享	3377	開催時、ポスター等で広報	〃
	26	アマチュア無線の会	☆浅田旭彦	1258	希望者は電話で申し込んで下さい	〃
	27	「子どもの生活」研究会	加藤育生 北村雅子	5223 0753	希望者は電話で申し込んで下さい	〃

会　則

第一章　総　則

第一条　この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条　事務局は、平城西公民館に置く。

第二章　目的及び事業

第三条　会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1　講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。

2　関連文化団体との連携及び協力。

3　研究の奨励及び研究業績の表彰。

4　会誌の発行。

5　その他目的を達成するために必要な事業。

第三章　会　員

第五条　平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1　正会員　年間会費　一、五〇〇円
　但し、高校生　五〇〇円

2　賛助会員　この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費　五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

第四章　役　員

第六条　協会には次の役員を置く。
会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、理事若干名、監事二名。

第七条　理事は、正会員中より選出する。
二、会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め、総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八条　会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当るとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当る。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九条　顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十条　役員の任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠により選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章　会　議

第十一条　理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は、理事の二分の一以上出席しなければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第十二条　常任理事会は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条　通常総会は、毎年一回会長が招集する。

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたとき会長が招集する。

三、総会の議長は、総会出席者の中から指名する。

四、総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第十四条　次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

1　事業報告及び収支決算

2　会計監査報告

3　事業計画及び収支予算

4　その他理事会において必要と認めた事項

第六章　会計

第十五条　経費は会費並びに補助金、寄付金、その他の収入による。

第十六条　会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章　会則の変更

第十七条　この会則は、総会の議決を経なければ変更することができない。

第八章　補則

第十八条　この会則施行についての細則は、理事会の議決を経て別に定める。

第十九条　この会則は、昭和五十八年二月二十七日から適用する。

一九九六年度 役員名簿

会長　網干善教
副会長　橙　修造
　　牧野自然
　　松岡禮一
事務局長　山内梅乃
次長　此下　享
会計　大浦小枝子
監事　西村美佐子
　　渡邊亮斗
参与　川口　勇
　　谷口直子
　　永田喜一郎
常任理事　赤座右一
　　上中敏央
　　打田照子
　　大迫くき枝
　　岡田越子
　　梶野　哲
　　鎌田時栄
　　北村孫衛
　　鬼頭清明
　　木庭和子
　　久富木幸子
　　込山博介
　　鈴木幸子
　　高橋節子
　　田中幸夫
　　玉置小代
　　中野昭三
　　中村正雄
　　南村勝次
　　西島芳子
　　西幹友雄
　　西山佐代子
　　東　叡
　　東山幹子
　　廣田省吾
　　前川良雄
　　毛利公子

理事
　　山元洋子
　　吉田篤史
　　大井政子
　　大工美智子
　　筧　ゆり子
　　河村美智子
　　喜多正恵
　　北川尚子
　　澤田寶子
　　柴田晃良
　　中田光子
　　西岡智子
　　濱口光良
　　水野康枝
　　山下良吉
　　吉村惣五郎